松山市文化財調査報告書23

来住廃寺

—平成２年度調査概報—

1991

松山市教育委員会
松山市立埋蔵文化財センター

来住廃寺

—平成２年度調査概報—

1991

松山市教育委員会
松山市立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は来住廃寺寺域確認調査の平成2年度分報告書である。

2．調査は、下記の組織で行った。

松山市教育委員会	教育長(前任)	平井　亀雄			
	教　育　長	池田　尚郷			
	教育長付参事	古本　　克			
	教 育 次 長	井上　量公			
	教 育 次 長	一色　正士			
文化教育課	課　　長	渡部　忠平	松山市立埋蔵文化財センター	所　　長	森脇　　將
	課長補佐	大野　衛治		調査係長	西尾　幸則
	第二係長	西　　伸二		調査主任	田城　武志
	第二係主事	重松　佳久		調査主事	栗田　正芳
	第二係主事	宮崎　　敦		調 査 員	上田　　真
				調査員補	山本　健一

3．本書の執筆は、上田真と山本健一、遺構の写真撮影は上田真と大西朋子、遺物の撮影は大西朋子が行い、上田真が主として編集した。

4．発掘調査参加者は以下の通りである。

相原忠重　岡本邦栄　是沢嘉昭　田中勲　田中国広　束村智恵子　中屋経子　西田竹雄
西田竜一　野口美佐美　羽田野修三　平松正乃　藤本明宏　松岡末一　三江元則

5．発掘調査参加者以外の整理参加者は以下の通りである。

小川雅子　田窪あゆみ　富田紳子　西山美喜　兵頭牧子

6．本書の作成に当って以下の方にご指導・ご教示を賜った。ご厚情に感謝致します。

上原　真人（奈良国立文化財研究所）
櫻井　信也（大谷大学）
山中　敏史（奈良国立文化財研究所）

（五十音順）

本 文 目 次

第一章　調査に至る経過 …… 1

第二章　周辺の環境 …… 2

第三章　検出された遺構と遺物

第一節　調査の概要 …… 3

第二節　主な検出遺構 …… 6

第三節　主な出土遺物 …… 14

第四章　ま　と　め …… 21

図 目 次

図１　前年度までの発掘調査地と今年度発掘調査地 …… 1

図２　周辺の遺跡 …… 2

図３　Ａ地区検出遺構 …… 4

図４　Ｂ・Ｃ地区検出遺構 …… 5

図５　ＳＢ－１　平・断面図 …… 7

図６　ＳＢ－２　平・断面図 …… 8

図７　ＳＫ－１　平・断面図 …… 9

図８　ＳＫ－５　平・断面図 …… 9

図９　ＳＫ－７　平・断面図 …… 10

図10　ＳＫ－９　平・断面図 …… 10

図11　ＳＫ－11　平・断面図 …… 10

図12　ＳＫ－14　平・断面図 …… 11

図13　ＳＤ－３　平・断面図 …… 11

図14　ＳＤ－４　平・断面図 …… 12

図15　ＳＸ－１　平・断面図 …… 12

図16　ＳＫ－15　平・断面図 …… 12

図17　ＳＢ－３　平・断面図 …… 13
図18　Ｂ地区遺物包含層出土弥生土器 …… 16
図19　弥生土器 …… 17
図20　須恵器 …… 18
図21　軒瓦 …… 19
図22　瓦 …… 20

図　版　目　次

図版１　Ａ地区　西半遺構検出状況
Ａ地区　東半遺構検出状況
図版２　Ｂ地区　遺構検出状況
Ｂ地区　掘り上り
図版３　ＳＢ－１　遺構検出状況
ＳＢ－１　掘り上り
図版４　ＳＢ－２　遺構検出状況
ＳＢ－２　掘り上り
図版５　ＳＫ－１　遺構調査状況
ＳＫ－１　掘り上り
図版６　ＳＰ－31
ＳＰ－39
図版７　遺物包含層遺物出土状況(1)
遺物包含層遺物出土状況(2)
図版８　遺物包含層遺物出土状況(3)
遺物包含層遺物出土状況(4)
図版９　ＳＫ－３
ＳＫ－１
図版10　ＳＤ－４
ＳＢ－３
図版11　Ｃ地区　遺構検出状況
Ｃ地区　掘り上り
図版12　弥生土器

図版13　弥生土器・石錘
図版14　須恵器
図版15　須恵器
図版16　ＳＰ－31　出土軒丸瓦
　　ＳＰ－39　出土軒平瓦
図版17　ＳＤ－４　出土瓦
図版18　ＳＫ－５　出土焼土

表　目　次

表１　ＳＢ－１　柱穴一覧 …… 6
表２　ＳＢ－２　柱穴一覧 …… 6
表３　ＳＢ－３　柱穴一覧 …… 14

第一章　調査に至る経過

来住廃寺は松山市来住町850番地の長隆寺周辺に所在する白鳳時代寺院跡で、戦前から好事家の間で瓦散布地として知られていたが、昭和42年、当時大谷大学学生であった大山正風氏による発掘調査で塔と講堂の位置が確認され、その位置関係から法隆寺式伽藍配置をとる寺院跡であることが推定された。昭和52年、松山市来住町852番地の長隆寺北側の土地7,440㎡の宅地造成の申請が出され、その一部2,216㎡について第2次調査を行ったところ、来住廃寺僧房・回廊・掘立柱建物の他、弥生時代や古墳時代の竪穴住居跡などが検出された。このため、翌年国庫補助を受けて、来住廃寺の規模や建物配置を明らかにすることを目的とする第3次調査を行い、講堂規模を確認した。これらの成果を受けて来住廃寺は昭和53年国の史跡に指定された。

その後、この地域では、市街化区域の調整などもあって、緊急発掘の件数が急増した。このため、松山市教育委員会では昭和62年度より文化庁と奈良国立文化財研究所の指導を受けて、来住廃寺の寺域確認調査を行うこととなった。その結果、第2・3次調査で検出された回廊が来住廃寺の主要伽藍ではなく、その西隣の一町（約100m）四方を囲むこと、この回廊内の北側に正殿または後殿と見られる大型の掘立柱建物が存在することが新たに明らかになった。本年度はその4年目に当たり、金堂の検出を主な目的として、塔跡東方の来住町595

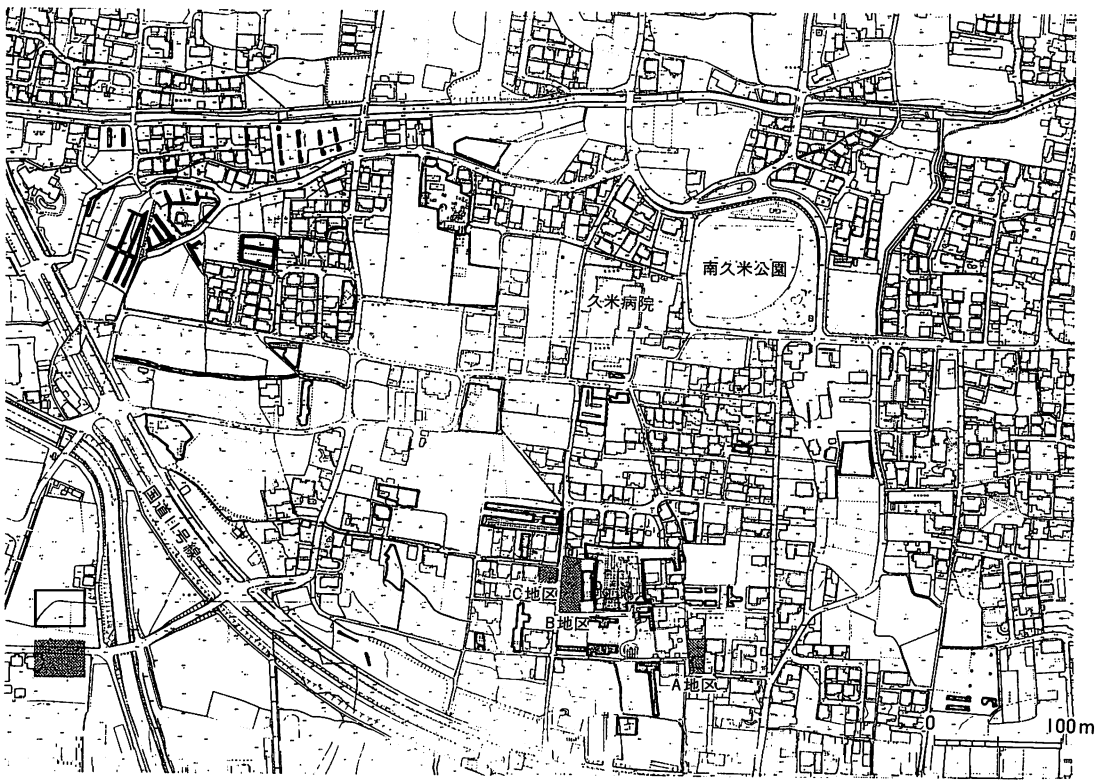


図1　前年度までの発掘調査地と今年度発掘調査地

番地１・３の鈴木義隆氏所有地（Ａ地区）、回廊内の建造物と来住廃寺西限の検出を主な目的として、僧房跡西方の来住町855番地の岸二省氏所有地（Ｂ地区）及び来住町856番地18の竹葉忠氏所有地の（Ｃ地区）調査を平成２年９月３日から平成３年１月31日の５ヶ月間にわたって行った。

第二章　周辺の環境

松山平野を形成した重信川には幾つかの支流があるが、その最も大きなものは松山市東部から南部を南西に流れて出合で合流する石手川である。この石手川に小野谷を南流した後西に向きを変えて市坪付近で合流するのが小野川であり、両河川に挟まれて標高518ｍの観音山を中心とする山塊がある。来住廃寺はこの山塊の南山裾から西に伸びる来住台地上にあり、南方を流れる小野川までは約400ｍの距離があるが、現在小野川は来住廃寺の西方で不自然に向きを変えており、本来はもっと北側の来住廃寺に近い所を流れていたと思われる。従って、来住廃寺は小野川から石手川、重信川を介して弥生時代の拠点的集落である文京遺跡を含む道後城北地域や７世紀中葉の須恵器窯である駄馬姥ヶ壊窯を含む小野谷の窯業地域、東海系の灰釉陶器と10世紀の土師器が出土した石井幼稚園遺跡などと繋がり、更には瀬戸内海に通じる交通の要所にある。また、付近は経石山古墳、三島神社古墳、波賀部神社古墳など

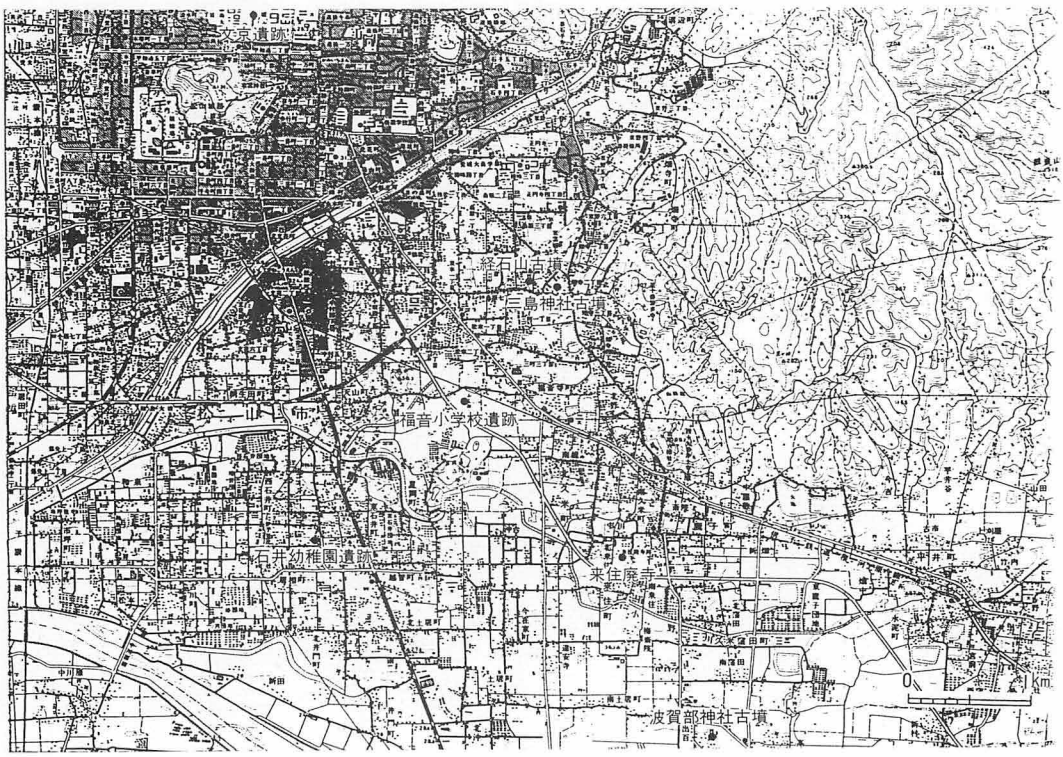


図２　周辺の遺跡

古墳時代中期末から後期の首長墓と推定される古墳が集中し、同時代の中心的地域として知られていたが、近年、北西約1.5㎞の福音小学校予定地より、古墳時代中期の大集落跡が検出され、古墳時代中期に遡る拠点的地域であると推定されるようになった。

第三章　検出された遺構と遺物

第一節　調査の概要

A地区（図3）

松山市来住町595番地1・3の鈴木義隆氏所有地で、来住廃寺塔跡東約50ｍの地点に当たるため金堂跡の検出が期待された。調査は廃土置き場を確保するため、対象地を東西2回に分けて、隣接地との境界付近を除くほぼ全面行ったが、ピット50余を検出しただけで、礎石、基壇、雨落溝など金堂の存在を示唆するものは皆無であった。また、遺物も弥生土器と6世紀代の須恵器が中心で、瓦や来住廃寺の時期の7世紀後半から8世紀に下る土器は見られなかった。

B地区（図4）

松山市来住町855番地の岸二省氏所有の畑地で、来住廃寺僧房跡の西方、回廊状遺構の東部中央に当たり、来住廃寺西限または、回廊状遺構に伴う脇殿的建物の検出が期待された。調査は当初東西のトレンチを4本設定して行ったが、掘立柱建物の一部が検出されたためその間を調査、更にC地区調査後C地区ＳＢ－1の道路を挟んだ延長部を調査した。その結果、掘立柱建物2棟、土坑13基、ピット50全、溝4条他、土器溜を検出した。掘立柱建物2棟はいずれも梁行2間と小規模であるが、ＳＢ－1は柱掘方が長細く、角のものが斜めを向くという東北地方の官衙遺跡に類例を持つもので注目される。また溝ＳＤ－4は幅は西側が調査区外のため不明であるが、確認面よりの深さが約40cmとこれまでに検出された溝のなかで最も深く、瓦が多数出土することもあって、来住廃寺西限の可能性が高い。ピットＳＰ－31、ＳＰ－39よりは各奈良時代の軒丸瓦と軒平瓦が出土し、来住廃寺経営時のものと思われる。

C地区（図4）

松山市来住町856番地18の竹葉忠氏所有地で、B地区とは道路一本隔てた隣接地である。

B地区と同様、来住廃寺西限または回廊状遺構内の建物の検出が期待された。調査は廃土を市有地に排出することによりほぼ全面行った。その結果掘立柱建物1棟、土坑1基、溝1条他を検出した。掘立柱建物は総柱建物と推定されるが、東部、南部が調査区外であり、道路を隔てたB地区を新たに拡張して調査したがその延長部は検出されず、規模は不明である。柱掘方が円形で径約50cmと小さいこと、当地区の出土遺物が6世紀後半までであること等から来住廃寺に先行する古墳時代後期の倉庫であると推定される。

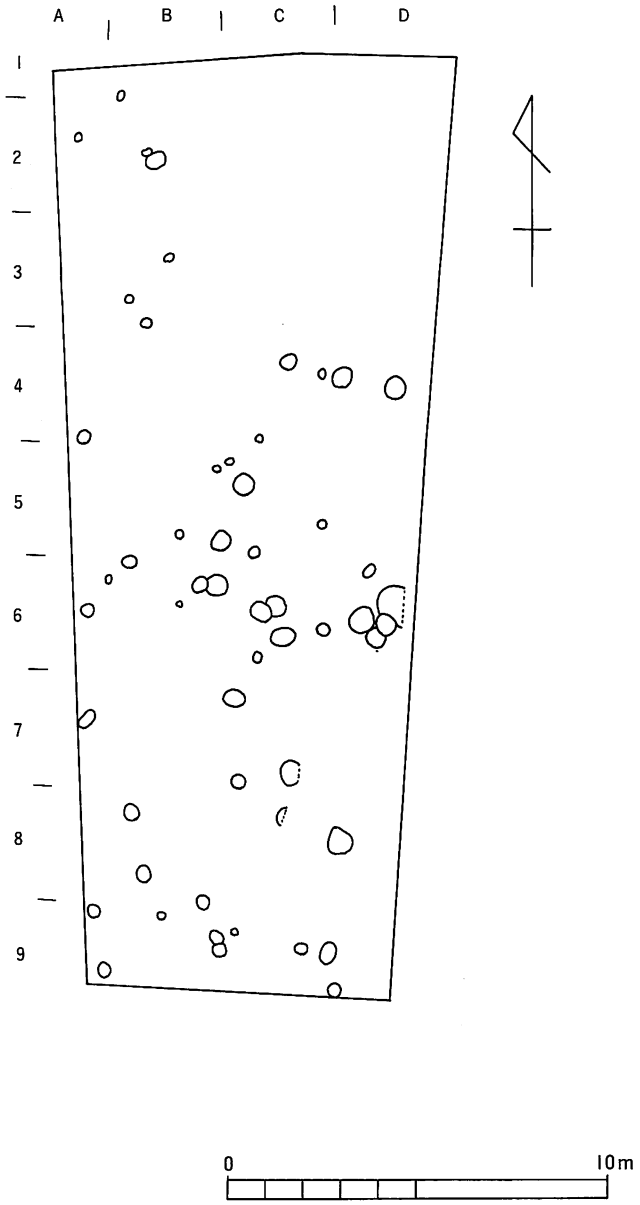


図３　Ａ地区検出遺構

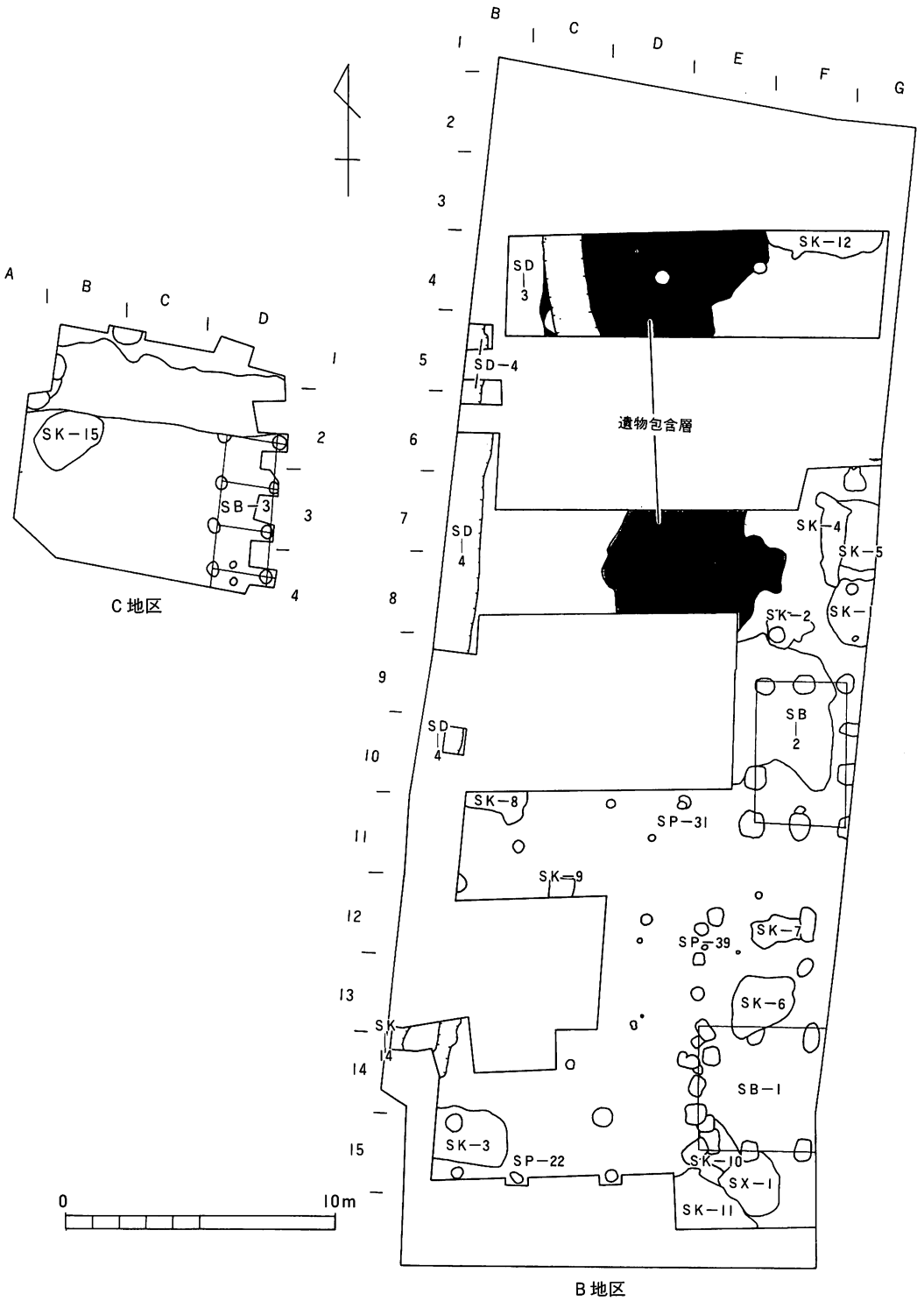

A
B
C
D
E
F
G
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
SK－12
SD
3
SD－4
遺物包含層
SK－15
SB－3
SD
4
SK－4
SK－5
SK－2
SK－1
SB
2
SK－8
SP－31
SK－9
SK－7
SP－39
SK－6
SK
14
SB－1
SK－3
SP－22
SK－10
SX－1
SK－11
0
10m
C 地区
B 地区

図４　Ｂ・Ｃ地区検出遺構

第二節　主な検出遺構

(1)　B地区

ＳＢ－１（図５）

調査区東南部のＥ－13～15、Ｆ－13～15グリッドで検出された。ＳＫ－10、ＳＰ－16、ＳＰ－25、ＳＸ－１を切り、ＳＸ－７に切られる。東部は調査区外のため未調査である。桁行２間以上、梁行２間、桁行方向Ｎ－88°－Ｅの側柱のみの掘立柱建物で、柱間は桁行が平均約2.0ｍ、梁行が平均約2.4ｍと梁行方向がやや長い。柱穴は64×62cmと正方形に近いものもあるが、最も長いもので111×53cmと細長いものが多く、角のものが45°斜めを向くという特徴を持つ。柱痕はすべての柱穴に見られたが、北側の桁行のものが北に、南側の桁行のものが南に大きく偏っていた。遺物は各柱穴から弥生土器片が出土しているが、いずれも混入と見られる。

	形　態	大きさ（長径×短径）	確認面からの深さ	柱痕の有無	柱 痕 径
Ｐ－１	隅丸長方形	94 cm×67 cm	27cm	有	22cm
Ｐ－２	〃	98　×55	34	〃	25
Ｐ－３	〃	97　×51	28	〃	23
Ｐ－４	〃	98　×50	25	〃	22
Ｐ－５	〃	111　×53	22	〃	22
Ｐ－６	〃	96　×65	22	〃	24
Ｐ－７	隅丸方形	64　×62	36	〃	23

表１　ＳＢ－１　柱穴一覧

ＳＢ－２（図６）

調査区東部のＥ－９～11、Ｆ－９～11、Ｇ－９～11グリッドで検出された。ＳＰ－29及び土器包含層を切る。桁行３間、梁行２間、桁行方向Ｎ－５°－Ｅの側柱のみの掘立柱建物で、柱間は桁行が平均約1.8m、梁行が平均1.6ｍと桁行方向がやや長い。柱穴は最大のものが96×85cmの隅丸方形、最小のものが55×34cmの不整形であるが、確認面よりの深さが平均6.7 cmと浅く、削平された上部ではこれよりやや大きかったと思われる。柱痕は確認されなかった。遺物は各柱穴から弥生土器片が出土しているがいずれも混入と見られる。

	形　態	大きさ（長径×短径）	確認面からの深さ	柱痕の有無	柱 痕 径
Ｐ－１	隅丸方形	96 cm×85 cm	10cm	無	——
Ｐ－２	〃	75　×73	5	〃	——
Ｐ－３	〃	84　×72	7	〃	——
Ｐ－４	〃	72　×75	6	〃	——
Ｐ－５	〃	55　×58	5	〃	——
Ｐ－６	不 整 形	90　×34	3	〃	——
Ｐ－７	隅丸方形	74　×57	13	〃	——
Ｐ－８	〃	74　×35	9	〃	——
Ｐ－９	〃	83　×75	4	〃	——

表２　ＳＢ－２　柱穴一覧

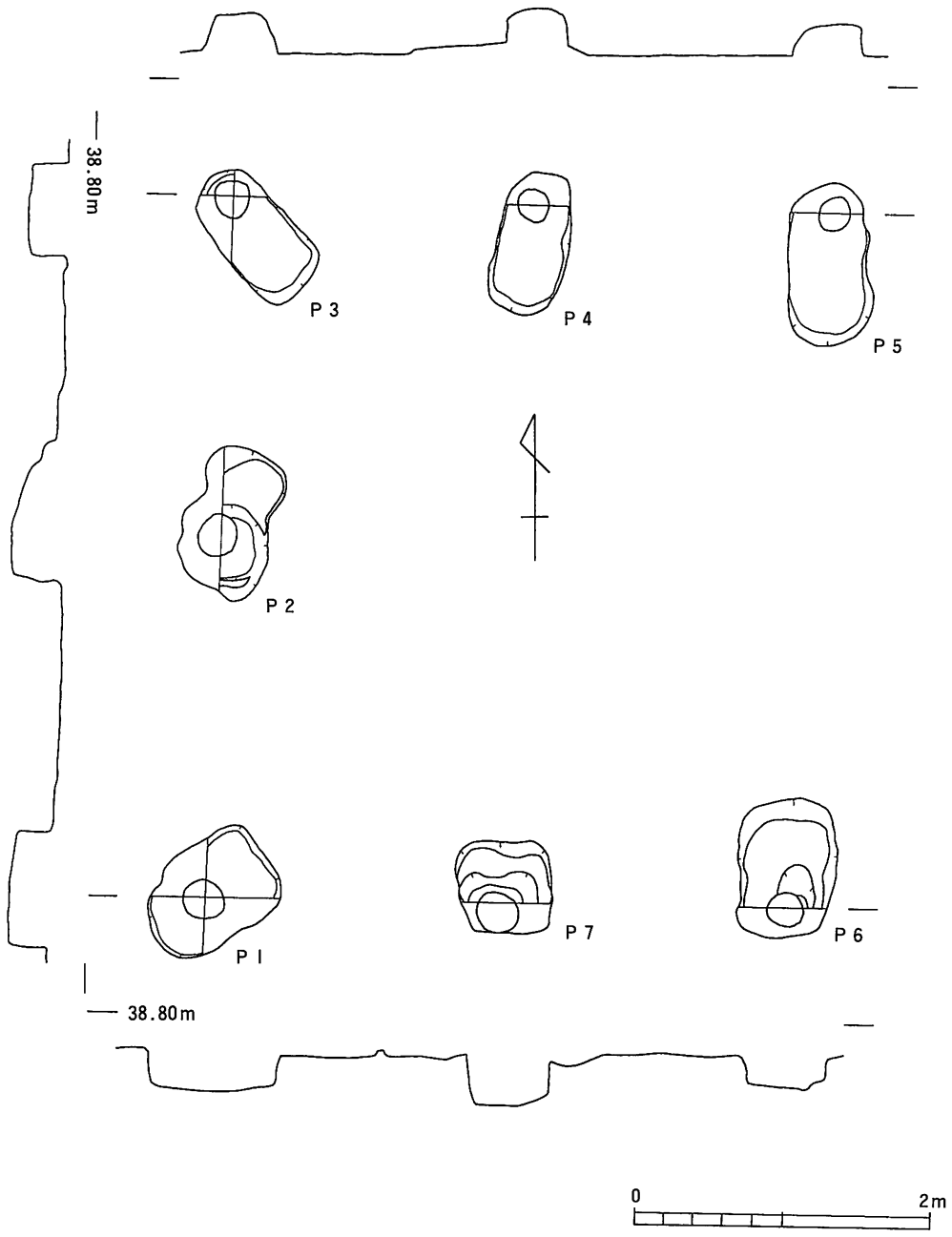


図5　ＳＢ－１　平・断面図

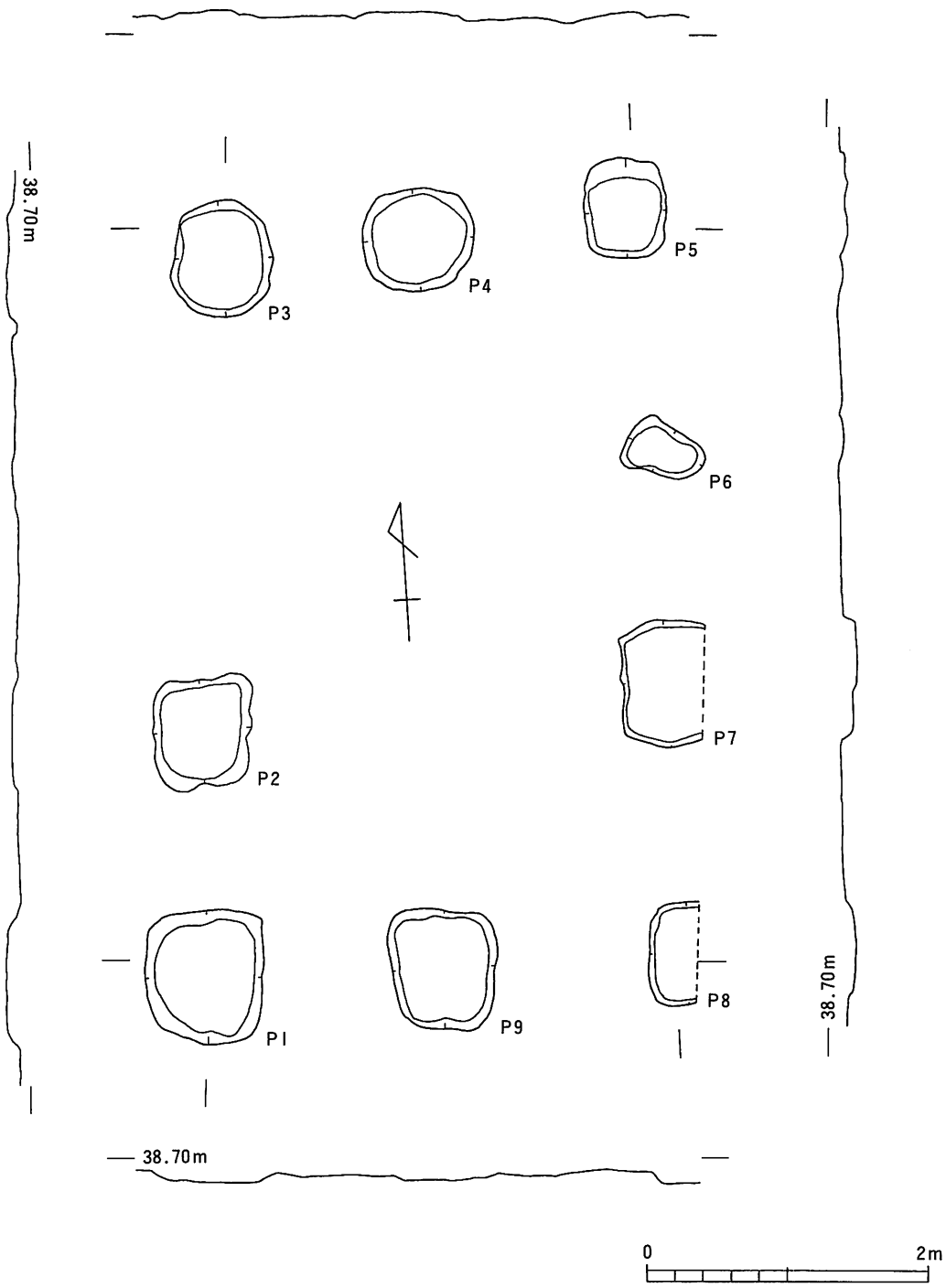


図6　ＳＢ－２　平・断面図

ＳＫ－１（図７）

調査区東部Ｆ－８、Ｇ－８グリッドで検出された。他の遺構との切り合い関係はない。東部が調査区外のため未調査であるが、直径約2.7ｍの円形または短径約2.7ｍの長円形を呈すると思われる。底面に溝状の掘り込みがあり、確認面からの深さは約45cmである。埋土は暗褐色土に黄色土粒が混るものを主体とするが、溝状の部分では、部分的に焼土が見られた。遺物は弥生土器底部片とサヌカイト製石鏃が出土しているが、混入と思われる。

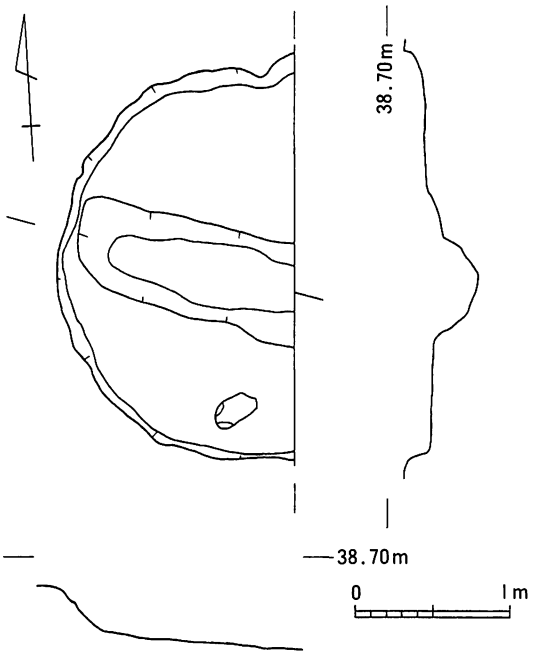


図７　ＳＫ－１　平・断面図

ＳＫ－５（図８）

調査区東部Ｆ－７、Ｇ－７グリッドで検出された。西部をＳＫ－７に切られる。東部は調査区外のため未調査であるが、上端が一辺約2.6ｍの正方形であると思われ、底面には円形の掘り込みがあり、更にその底面に溝状の掘り込みがあり、その中央部に炭化材の残る柱痕が確認された。確認面からの深さは約120 cmである。埋土は暗褐色土を主体とし、これに粒状の黄色土、７cm前後のブロック状の黄色土が混じるものがある他、溝状の部分は黄色土であった。遺物は、丸瓦片及び須恵器片が中層

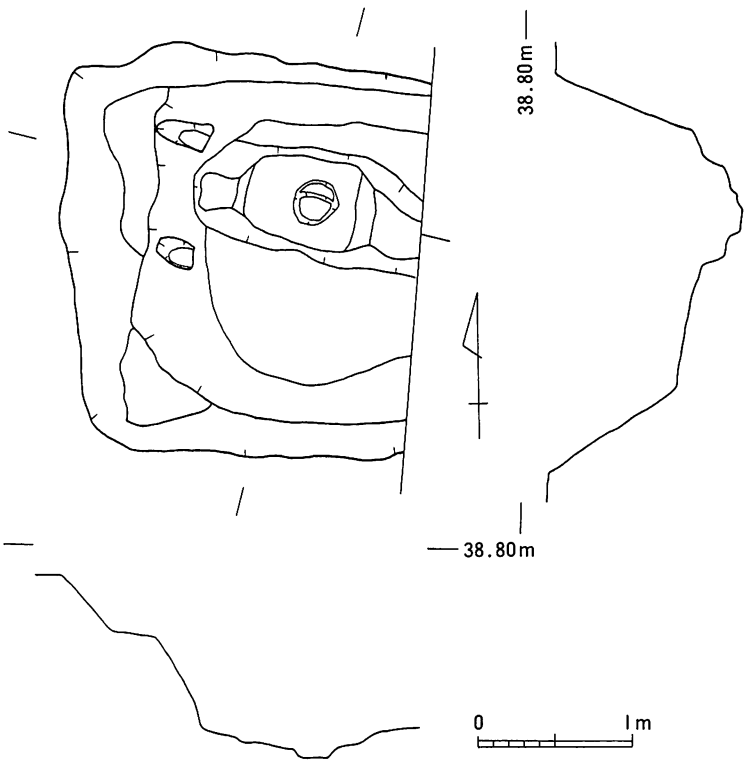


図８　ＳＫ－５　平・断面図

から下層に集中して出土している。

ＳＫ－７（図９）

調査区東南部Ｅ－12、Ｆ－12グリッドで検出された。東端部をＳＰ－42に切られる。長辺1.9ｍ以上、短辺約１ｍの長方形に近い不整形で、確認面からの深さは約20㎝、主軸方向はＮ－77°－Ｅである。埋土は黄色土混の黒褐色土で、遺物は弥生土器の他、須恵器片少数と焼礫が出土している。

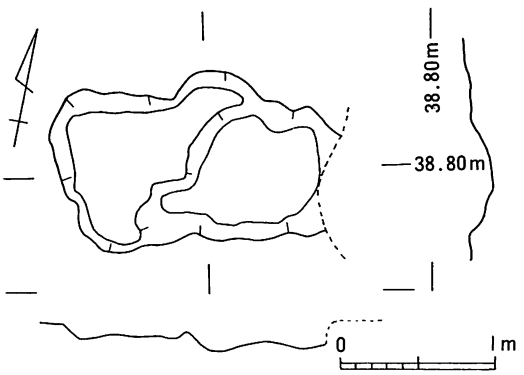


図９　ＳＫ－７　平・断面図

ＳＫ－９（図10）

調査区中央部Ｃ－11、12グリッドで検出された。他の遺構との切り合い関係はない。南部が未調査のため全形は不明であるが、短辺約1.0ｍの長方形になると思われ確認面からの深さは約35㎝である。埋土は淡灰褐色粘質土で、遺物は唐草文軒平瓦片の他、平瓦片、丸瓦片が出土しているが、いずれも磨滅している。

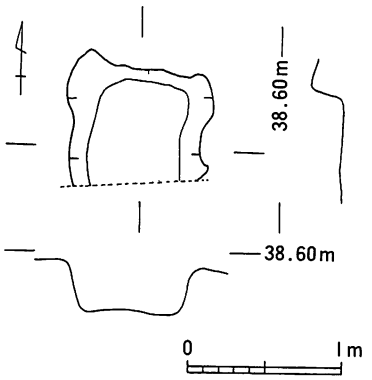


図10　ＳＫ－９　平・断面図

ＳＫ－11（図11）

調査区東南部Ｅ－15、16、Ｆ－15、16グリッドで検出された。ＳＸ－１を切る。西部及び南部は調査区外のため未調査であるが、１辺約3.2ｍの方形になるものと思われる。確認面からの深さ約25㎝で、埋土は、黒褐色土の上層と、黄色粘質土と黒褐色粘質土の混じった下層の上下２層に大きく分かれ、遺物はこの上層から、弥生土器と須恵器片が混在して出土した。

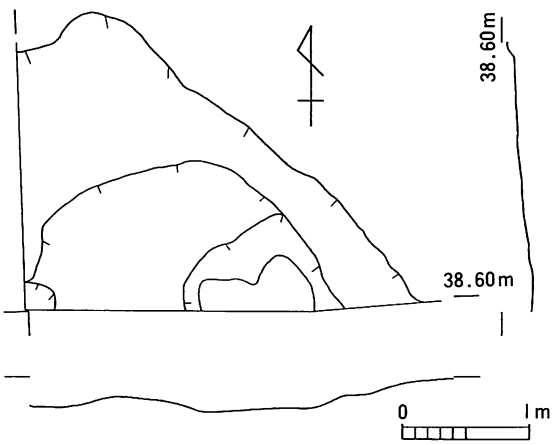


図11　ＳＫ－11　平・断面図

ＳＫ－14（図12）

調査区西南部Ａ－13、14グリッドで検出された。ＳＤ－４の延長部検出のため設けられた１ｍ四方の試掘坑で検出されたため全形は不明であるが、確認面からの深さは約25cmを計る。底面に配石があり、南北溝のようにも見える。埋土は淡灰褐色粘質土で、遺物は10cm大の礫による配石の上層より瓦片が出土している。

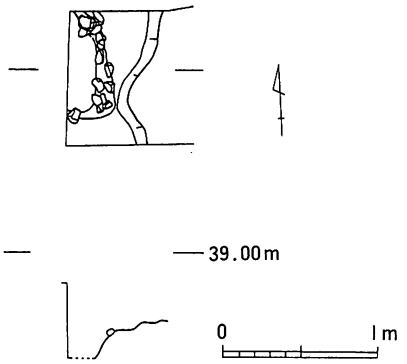


図12　ＳＫ－14　平・断面図

ＳＤ－３（図13）

調査区西北部Ｃ－３～５グリッドで検出された。周囲の土器包含層を切っている。幅約1.5ｍ、深さ約30cm、主軸方向Ｎ－12°－Ｗで、長さ約４ｍ分を検出している。埋土は黄色土粒を微量含む黒褐色で遺物は上層から10～20cm大の川原石少量、その直下から唐草文軒平瓦片を含む瓦片及び須恵器片が出土しているが、瓦片の半数は焼成が悪く磨滅していた。

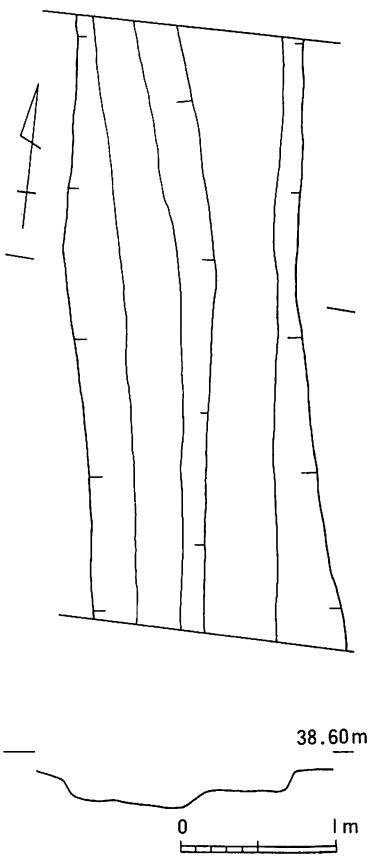


図13　ＳＤ－３　平・断面図

ＳＤ－４（図14）

調査区西部Ａ－７～10、Ｂ－５～10グリッドで検出された。他の遺構との切り合い関係はないが、西部は調査区外のため未調査である。全容は不明であるが、検出したところで長さ約8.2ｍ、幅約1.4ｍ、確認面よりの深さは約45cmあり、主軸方向はＮ－５°－Ｅと思われる。埋土は暗茶褐色土で遺物は、複弁六弁軒丸瓦片、唐草文軒平瓦片を含む瓦片の他、須恵器片、土師器片、弥生土器片が出土している。

ＳＸ－１（図15）

調査区東南部Ｅ－15、16、Ｆ－15、16グリッドで検出された。ＳＫ－11及びＳＢ－１に切られる。直径約2.2ｍの不整円形で、確認面からの深さは約25cmである。埋土は上層の暗褐色土と下層の黄色土を層状に含む暗褐色土の上下２層に大きく分かれ、遺物は弥生土器片、須恵器片及び10～15cm大の川原石が主として上層から重なって出土している。

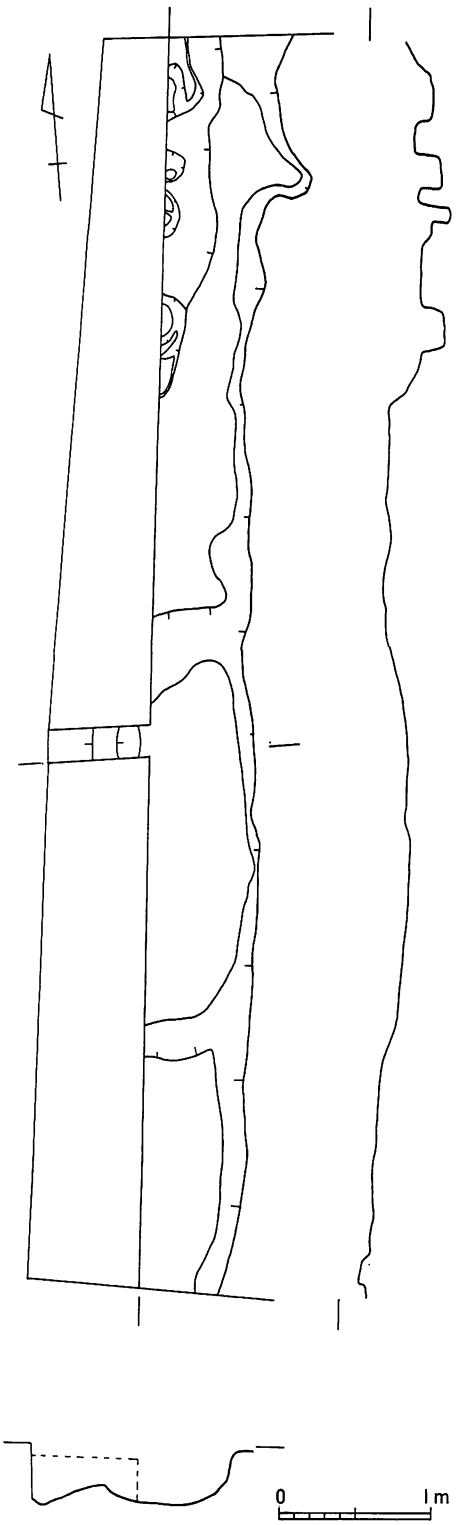


図14　SD－4　平・断面図

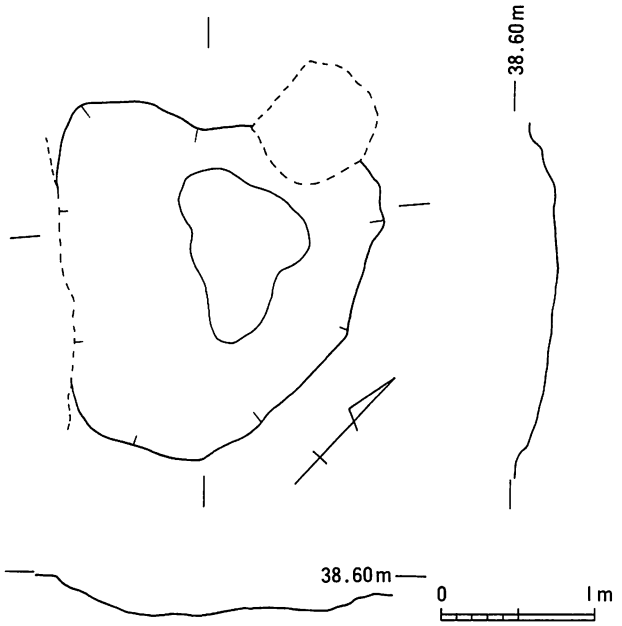


図15　SX－1　平・断面図

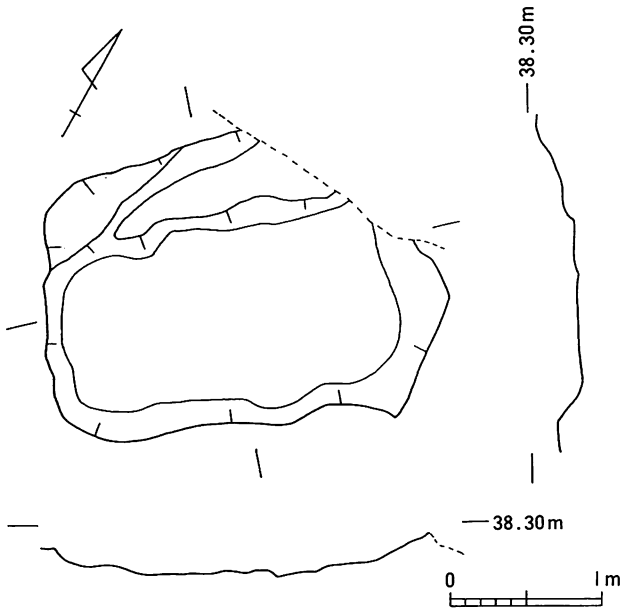


図16　SK－15　平・断面図

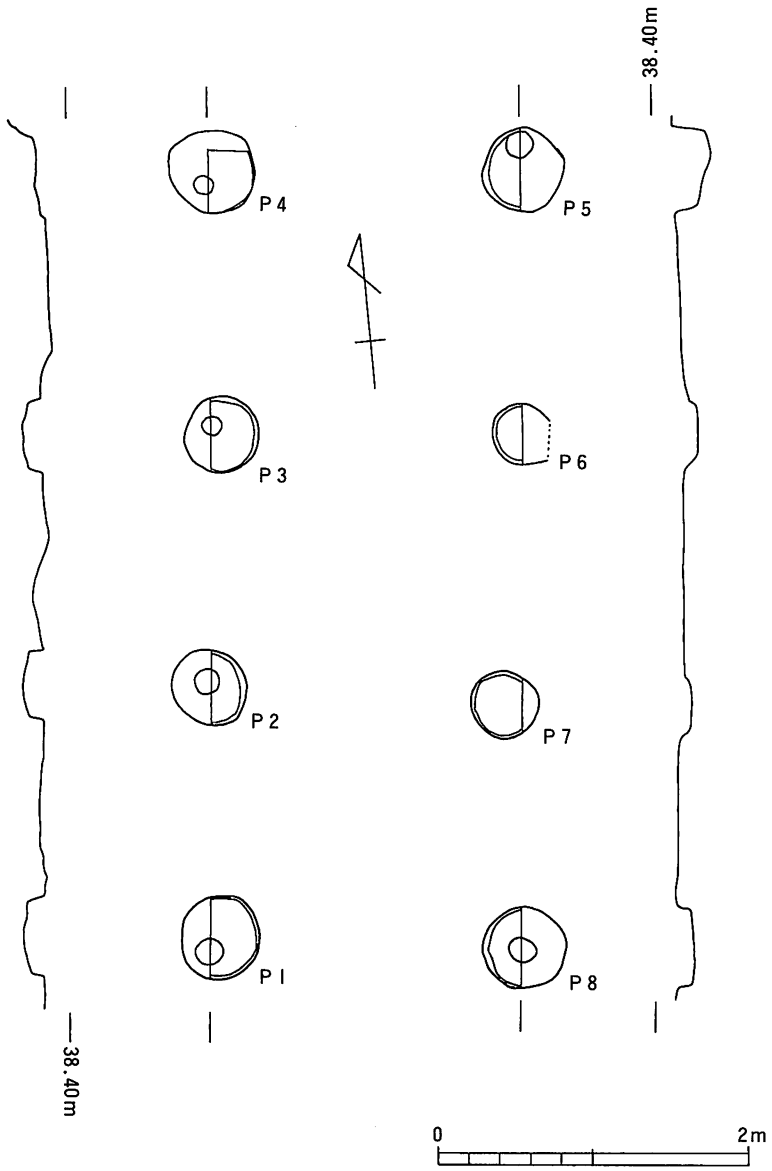


図17　SB－3　平・断面図

(2)　C地区

ＳＫ－15（図16）

調査区西北部のＢ－２グリッドで検出された。北部をＳＤ－４に切られる、長辺約2.6ｍ、短辺約1.8ｍの隅丸方形で、主軸方向はＮ－50°－Ｅ、確認面からの深さは約25cmである。埋土は暗茶褐色土を主体とし、遺物は横瓶・杯蓋などの須恵器片及び骨片が出土している。

ＳＢ－３（図17）

調査区東部Ｄ－２～４、Ｅ－２グリッドで検出された。北部をＳＤ－４に切られ、東部及び南部は調査区外のため未調査である。従って、検出されたのは桁行３間、梁間１間分であるが、桁行と梁間の比率が悪く、恐らくは東側の調査区外にもう１間分はある３間×２間以上の総柱の掘立柱建物になると思われる。桁行を南北すると、桁行方向はＮ－６°－Ｅで、柱間は桁行が平均約1.7ｍ、梁間が平均約2.1ｍと梁間方向がやや長い。柱穴は直経約40～55cmの円形で、確認面からの深さは平均約12cmと浅く、８個中側柱になる可能性の高い６個に径平均約15cmの柱痕が見られた。遺物はほとんどの柱穴から弥生土器小片が出土しているが、いずれも混入と思われる。

	形　態	大きさ（長径×短径）	確認面からの深さ	柱痕の有無	柱 痕 径
Ｐ－１	円　形	56 cm×52 cm	13cm	有	17cm
Ｐ－２	〃	50　×47	14	〃	14
Ｐ－３	〃	51　×48	13	〃	13
Ｐ－４	〃	54　×54	6	〃	13
Ｐ－５	〃	56　×55	24	〃	17
Ｐ－６	〃	40　×38	6	無	——
Ｐ－７	〃	53　×44	7	〃	——
Ｐ－８	〃	55　×53	11	有	16

表３　ＳＢ－３　柱穴一覧

第三節　主な出土遺物

(1)　弥生土器（図18．19）

Ａ・Ｂ・Ｃ全地区から出土しているが、特にＢ地区北部の遺物包含層及び東南部のＳＸ－１、ＳＫ－11からの出土が多い。ＳＸ－１、ＳＫ－11では６世紀代の須恵器と共伴している他、Ｂ地区の多くの遺構で弥生土器小片の出土が見られ、これらの遺構の構築時或は整地時に壊された弥生時代の遺構に伴っていたものと思われる。従って多くは小片で磨滅しており、弥生時代の遺物のみが出土し、遺存状態がよかったＢ地区の遺物包含層のものを図示した。図10－１～７は壺形土器の頸部に突帯を持つもの、櫛描の沈線文を施すもの、沈線の間に連

続刺突文を施すものなどが見られた。図18－８～10は甕形土器で８・10は体部下端が縦方向にヘラ削りされる底部破片、９は逆Ｌ字形に開く口唇部に半截竹管によると思われる刻み、その下の体部に櫛描沈線文や連続刺突文が施されるものである。図19は口縁部及び体部の拓本で、丸棒により刺突される突帯を持つもの、櫛描沈線文を施すもの、沈線の間に櫛描の山形文を施しものやヘラ描の斜格子文を施すものなどである。この他に図示はしていないが、壺棺と思われる大型土器の破片、石包丁、石鏃、石錘などの石器類が見られた。

(2) 須恵器(図20)

Ａ・Ｂ・Ｃ全地区から出土しているが、Ａ・Ｃ両地区では古墳時代後期のもののみしか出土していないのに対して、Ｂ地区ではその他にＳＤ－４から奈良時代のものも出土している。１・５・８は坏身で、８はまだ立ち上がり部が長いが、１・５では極く短くなっている。４・13は坏蓋で13は天井部と体部の境に沈線が僅かに残るものに対して、４では完全になくなっている。２・７は鍔で２は穿孔の上に沈線を持つもの、７は大きく発達した口縁部である。３は体部中位に稜を持つ椀、６は長頸壺の体部で３条の沈線の間に羽状に櫛歯文を施すものである。12は横瓶で、底部及び体部に渦巻状のカキ目調整が見られるが、体部下半はヘラ削り、頸部周辺はナデによって消されている。９～11はＢ地区ＳＤ－４から出土しており、９・10は端部がくの字に曲がる平たい蓋、11は外面に平行叩き、内面に同心円の当て具痕がかすかに見える甕形土器である。

(3) 瓦（図21・22)

Ｂ地区のＳＫ－５、ＳＫ－９、ＳＫ－14、ＳＤ－３、ＳＤ－４、ＳＰ－26、ＳＰ－31、ＳＰ－37、ＳＰ－39、ＳＰ－49から出土している。軒平瓦は３点出土し、すべて前回の報告でⅢ型式とした均整唐草文軒平瓦である。軒丸瓦は２点出土し、図21－３は前回の報告でⅣ型式とした複弁４弁蓮華文軒丸瓦、図21－４はⅦ型式とした複弁６弁蓮華文軒丸瓦である。図22は平瓦で、外面が格子・斜格子または細縄叩き痕、内面に布目痕の見られるものである。この他に磨滅しているため図示していないが、ＳＫ－14から太縄叩きの平瓦も出土している。

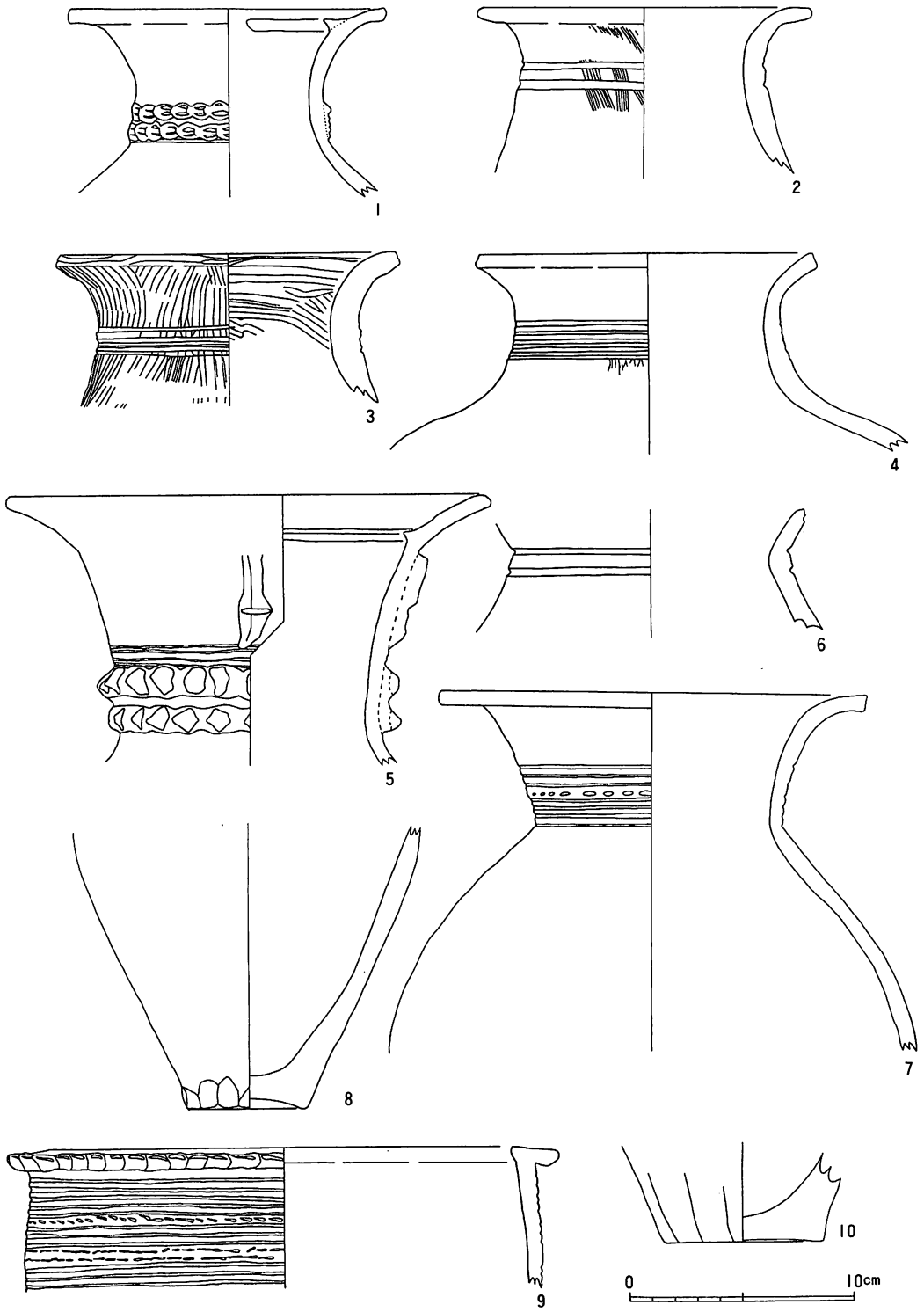


図18　B地区遺物包含層出土弥生土器
（1：C－3, 2～7：C－4, 8：C－5, 9：D－4, D－5, 10：D－4）

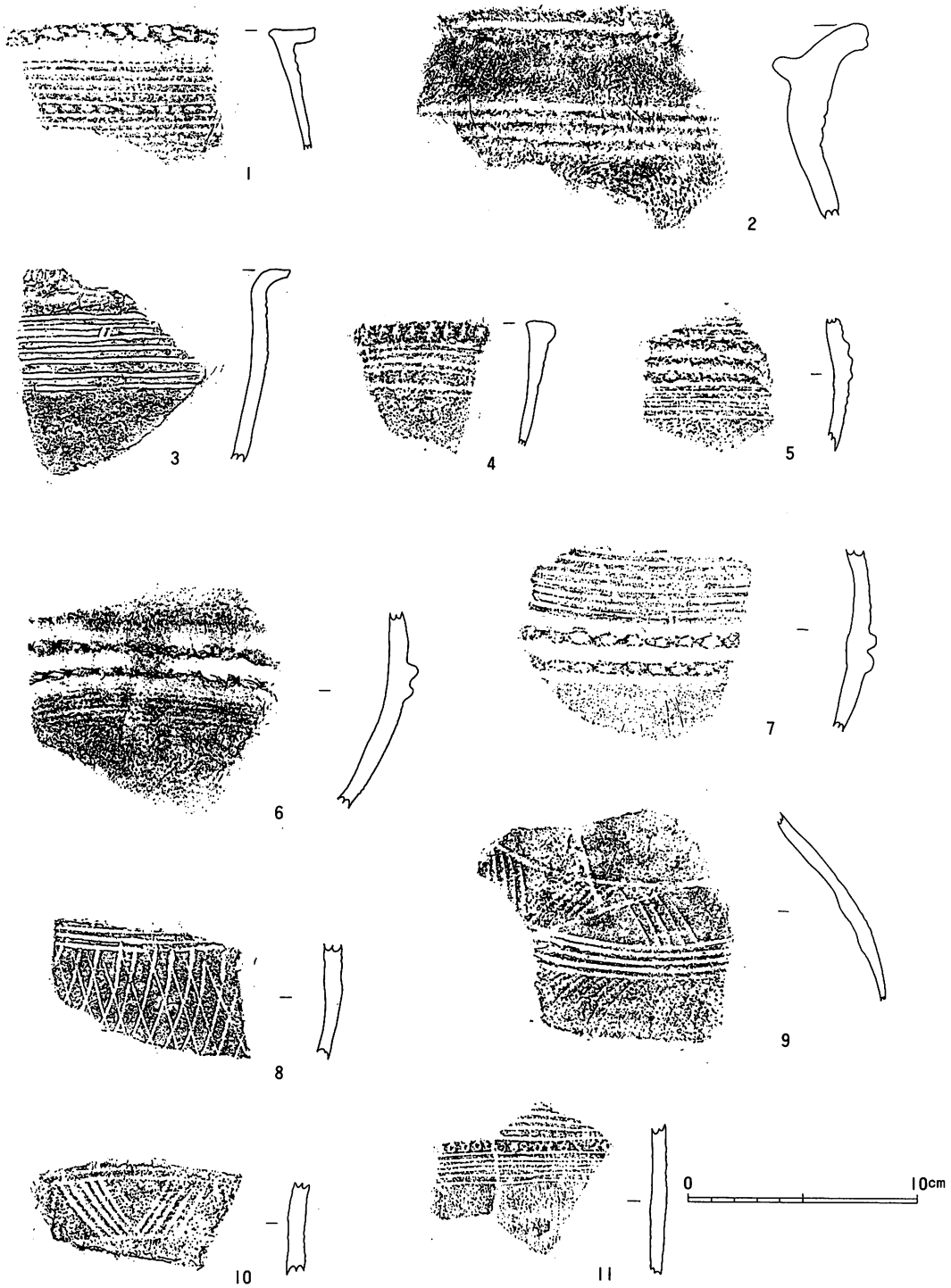


図19　弥生土器（B区C－4）

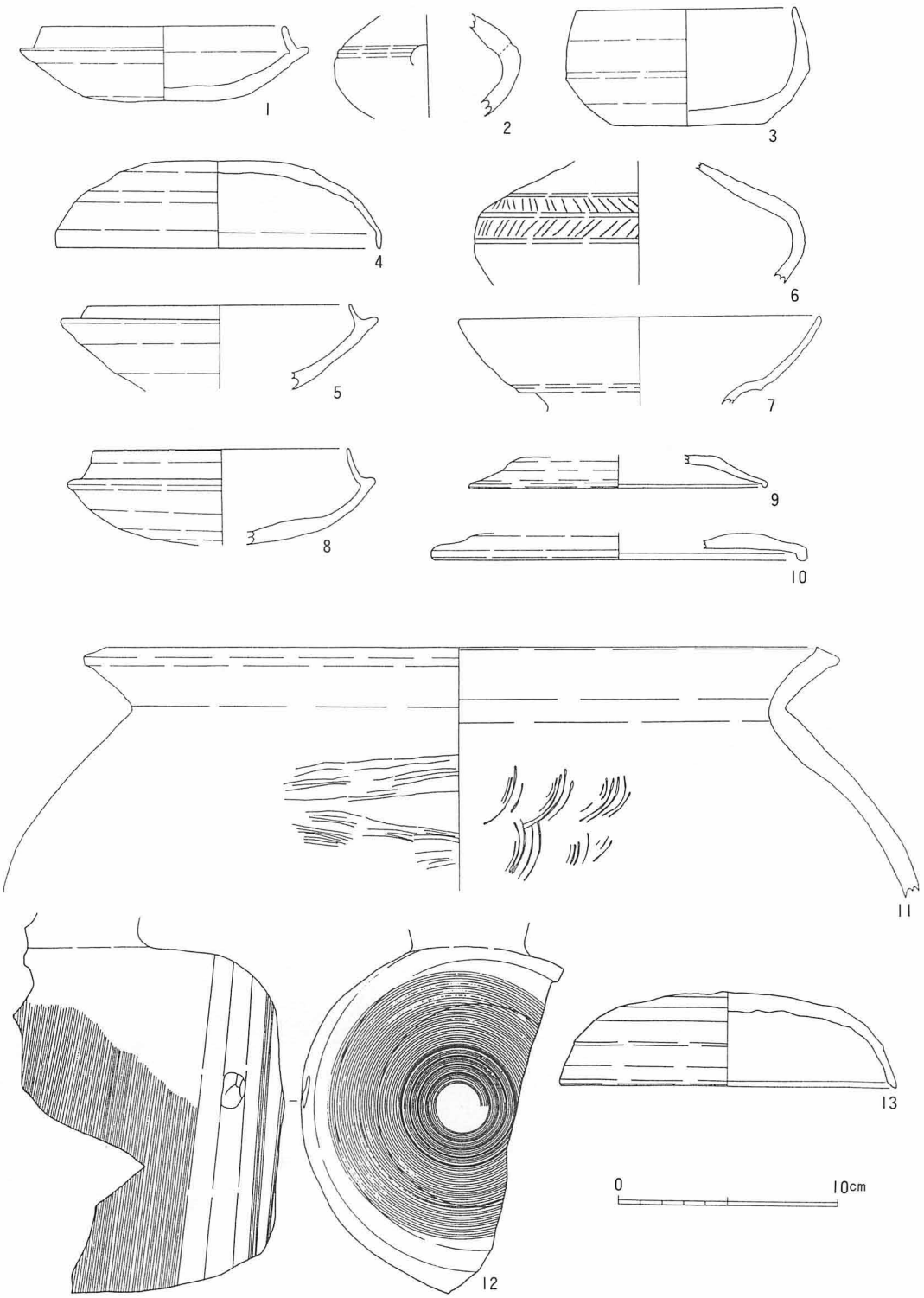


図20　須恵器　（1：A区 C－2, 2：B区 E－6, SK－11, 3·4：B区 E－6, 5·6：B区 SX－1, 7：B区 SK－1, 8：B区 SP－22, 9～11：B区 SD－4, 12·13：C区 SK－15）

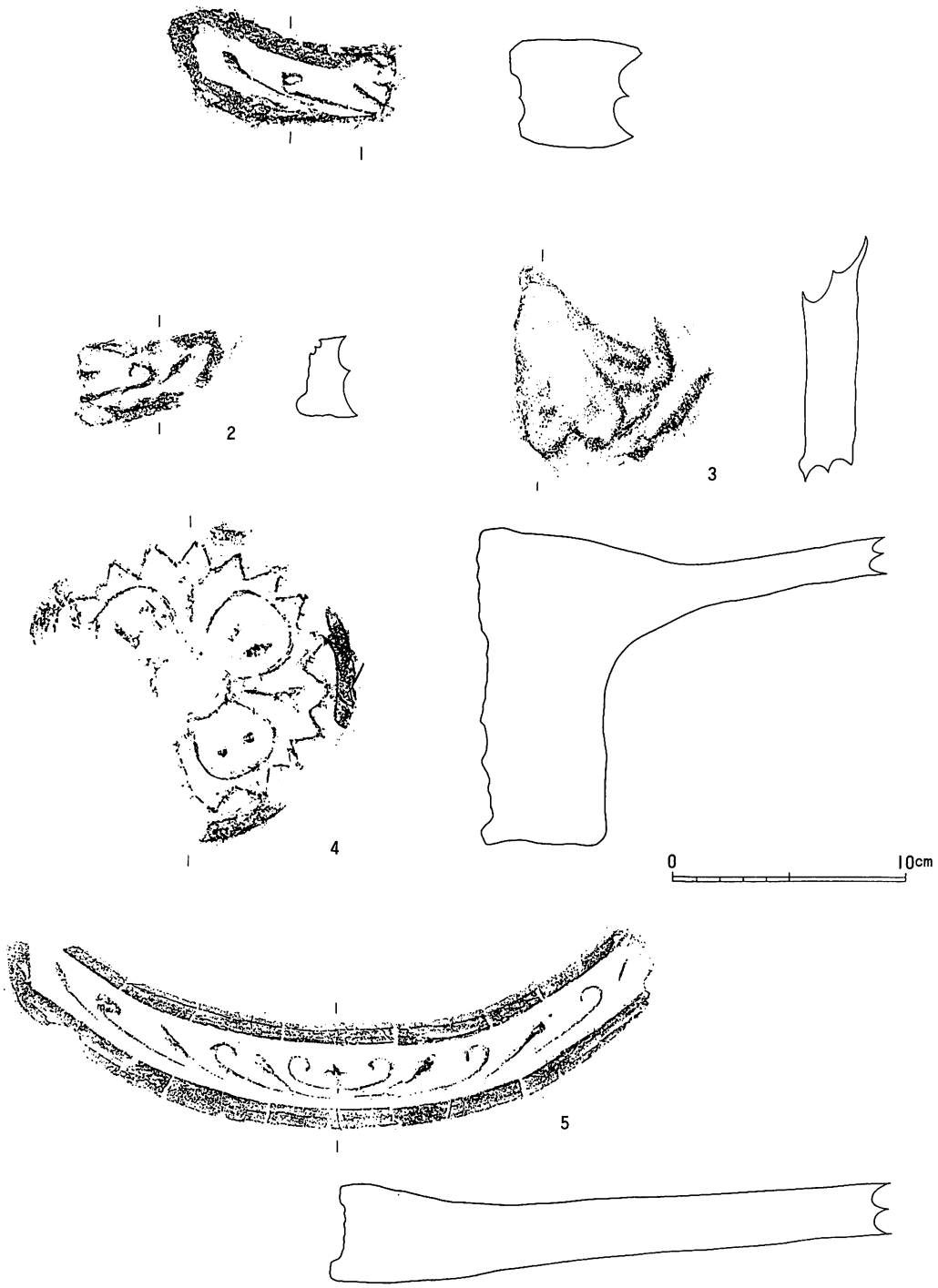


図21　軒瓦　(1：B区 SK−9, 2·3：B区 SD−4, 4：B区 SP−31, 5：B区 SP−39)

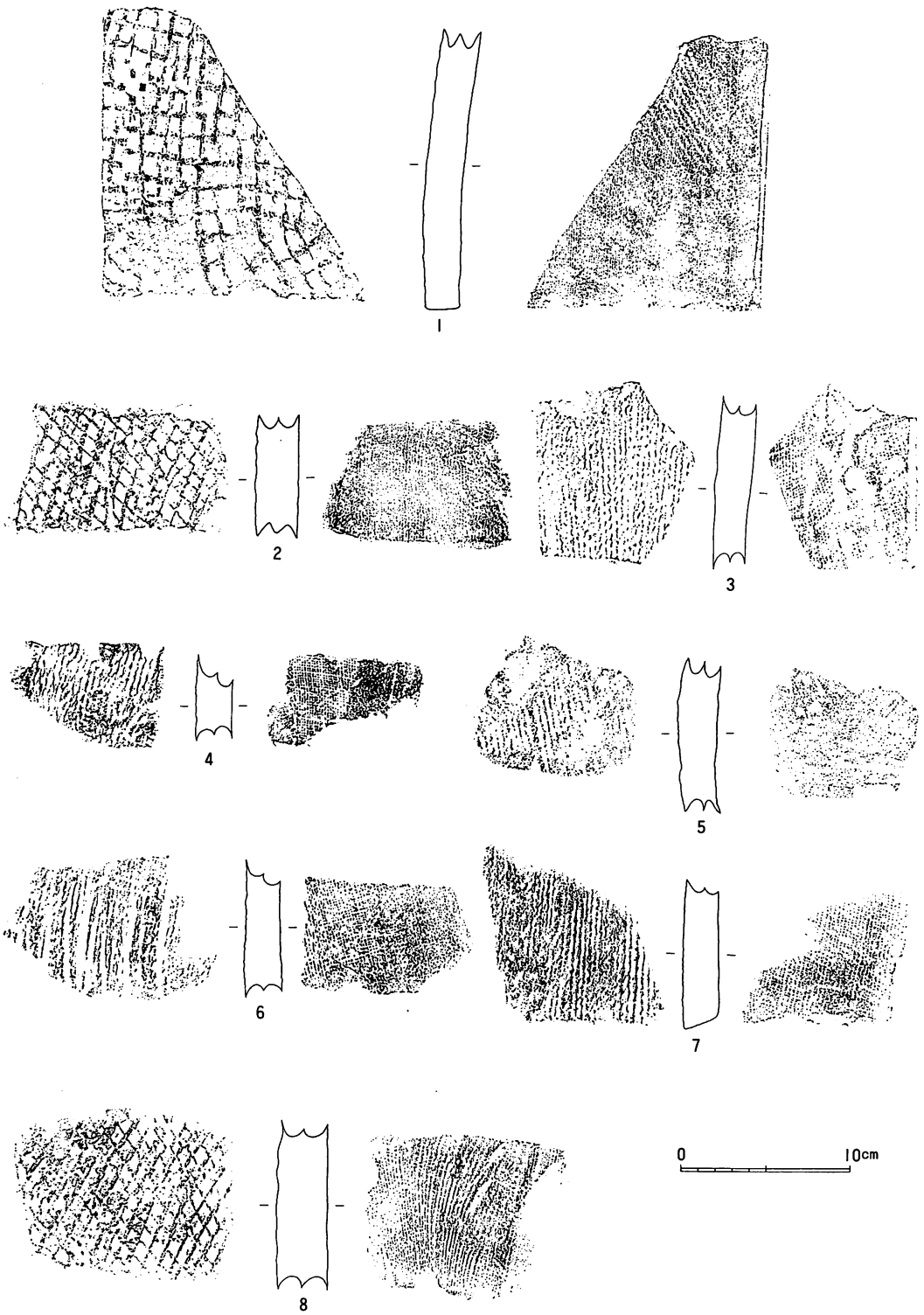


図22　瓦　(1～3：B区 SD－4, 4：B区 SK－9, 5～8：B区 C－4)

第四章　ま　と　め

以上のように今年度の調査は、金堂の検出・回廊内の建物の検出といった当初の期待のほとんどを裏切るものであった。そのなかで唯一期待通りだったかもしれないのは、来住廃寺西限の可能性が高いＢ地区の溝ＳＤ－４である。今年度の調査でも何条かの南北溝が検出されたが、いずれも確認面からの深さが10cm以内と浅く後世の削平を考慮しても来住廃寺西限としては弱いものであるのに対して、ＳＤ－４は確認面よりの深さが約45cmと深く、また８世紀中葉の須恵器に伴って軒丸・軒平瓦を含む瓦類が多数出土しており、軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせ及びその年代が推定できる好資料であると共に、溝ＳＤ－４の存続年代の一点が８世紀中葉にあることを示すものである。調査終了直前に検出されたため全長を押え切れておらず、西半分が発掘区外の道路下になるため幅も不明であるという難点があるが、逆に現在の地割が当時のものを踏襲している可能性があり興味深い。

この他に年代は限定できないが、８世紀代と推定できる遺構にＢ地区東南部で検出された掘立柱建物ＳＢ－１がある。このように柱穴掘方が細長く角のものが斜めを向く特徴的な掘立柱建物は宮城県多賀城跡、福島県郡山遺跡、同郡山五番遺跡など東北地方の官衙的な遺跡で見られ、山中敏史氏によって「斜め掘方」と仮称されている(1)。これらは８世紀後半～９世紀のものと推定されており、本遺跡のＳＢ－１もこれらと平行する時期とすれば、周辺から９世紀以後の遺物の出土がないことから８世紀の間に納まるものであろう。

同様にＢ地区東部で検出されたＳＢ－２も柱穴掘方からの出土遺物は混入と見られる弥生土器片のみであるが、周辺には８世紀代の瓦が出土するＳＫ－５、ＳＰ－31、ＳＰ－39などの遺構が散在し、根拠は薄いが８世紀代のものと推定される。

これに対してＢ地区のＳＤ－４の外側に当たるＣ地区ＳＢ－３は、周辺から出土する遺物が６世紀代までのものであること、柱掘方が円形で直径約50cmと小さく、官衙や寺院等に付属する建物とは考え難いこと等により、回廊状遺構創建以前の６世紀代の倉庫跡であると思われる。

このように、ＳＤ－４を境として東からのみ８世紀代の恐らくは来住廃寺の雑舎的建物が検出されるわけで、この点からもＳＤ－４が来住廃寺西限である可能性が高いと言える。

仮に溝ＳＤ－４を来住廃寺の西限とすると、先ず問題となるのが回廊との関係である。塔と近接し過ぎていることから、元々寺との同時存在は考え難かったが、この溝を西限とすると空間的に重なりを持ち、同時存在はあり得なくなる。

各々の時期は、昭和62年度の第５次調査で北面回廊と平行に走り回廊に伴うと見られる溝ＳＤ－６から７世紀中葉の杯蓋、広口壺、鉢、円面硯などの須恵器類及び素弁十弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦が出土し(2)、回廊跡がその存続年代の一点を７世紀中葉に持つと思われる一方、この素弁十弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦こそが来住廃寺の創建時のものと考えられ(3)、

これが回廊跡に伴う溝から出る経緯について考えなければならないが、(イ) 両者の存続期間が7世紀中葉の1点で接していることが考えられる。ところで、両者の存続期間は、回廊跡が建て替えがなく短期間であると考えられるのに対し、来住廃寺は7型式の軒平瓦、4型式の軒丸瓦が出土し、(4) 下限は8世紀末頃と考えられる。以上の2点からは回廊が7世紀中葉或はそれを僅かに遡る時期に造営され短期間存続した後廃絶し、来住廃寺が造営されたと考えられる。

次に回廊の性格及び廃絶の理由が問題となる。松原弘宣氏は回廊が7世紀中葉のもので、ほぼ同時期に久米評衙と考えられる久米高畑遺跡が存在していること、小野川の水運が利用できたこと等から、回廊を『日本書紀』斉明7（661）年正月条に見られる伊予行宮で、伊予国宰・伊予総領の施設に転用された後、8世紀初頭の伊予国府の移転時まで存続したとしている。(5) 松原氏の説には首肯できる点も多いが、上述のように回廊跡の8世紀までの存続は考え難い。

これまで14次にわたる調査にもかかわらず回廊内の大型の建造物が第11次調査で検出された梁行3間、桁行不明の掘立柱建物ＳＢ－1ぐらいで、今回の調査でもそれに付随すると思われる建物が検出されなかったことを考えれば、回廊内はそれ程整備されないうちに廃絶したのではなかろうか。この原因については天武13（684）年の大地震を考えられればよいが先の年代観とは合わない。記録に残らない何らかの災害か計画の変更によるものであろうか。今後、焼土層や砂礫層の検出に注意したい。

【註】

(イ) 『扶桑略記』には宮殿に瓦を葺いたのは藤原宮が最初であるとあり、それ以前の7世紀中葉に瓦を葺いた建物は寺院以外には考え難い。但し、この創建期の瓦を葺いた寺院が、現在確認されている講堂及び塔跡の場所に建っていたかどうかは分からない。

引用・参考文献

(1) 山中敏史　1980「遺跡からみた郡衙の構造」『日本古代の都城と国家』

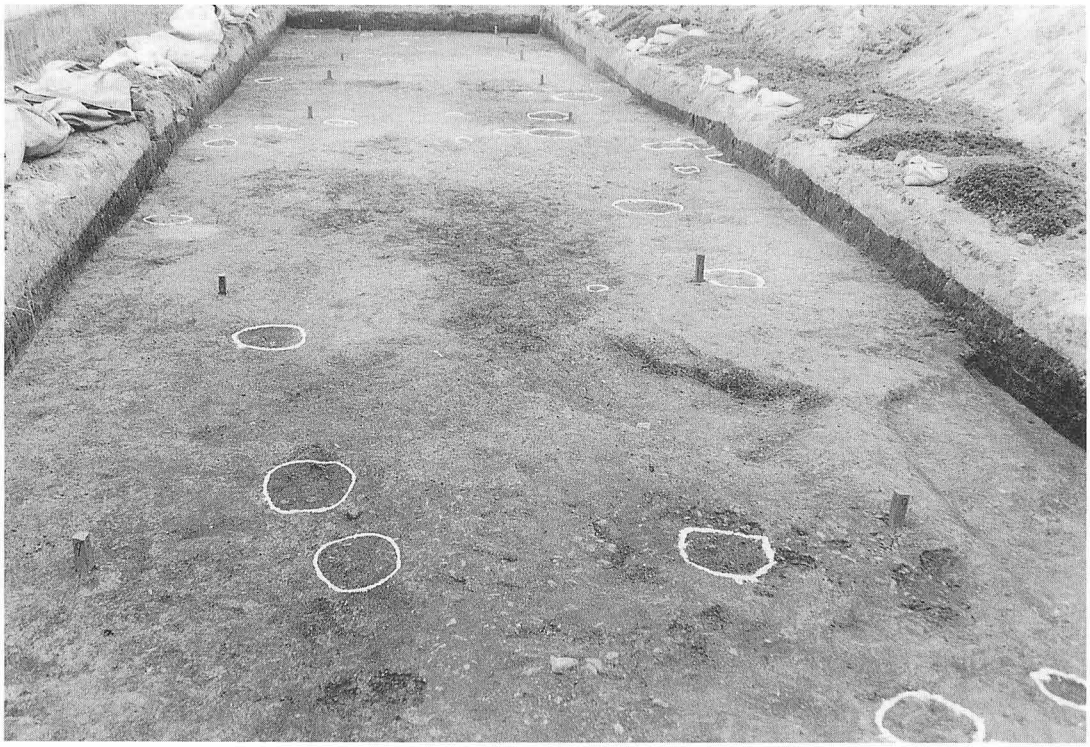
(2) 西尾幸則・池田　学　1989「来住廃寺寺域確認調査」『松山市埋蔵文化財調査年報II　昭和62～63年度』

(3) 小笠原好彦他　1979『来住廃寺』

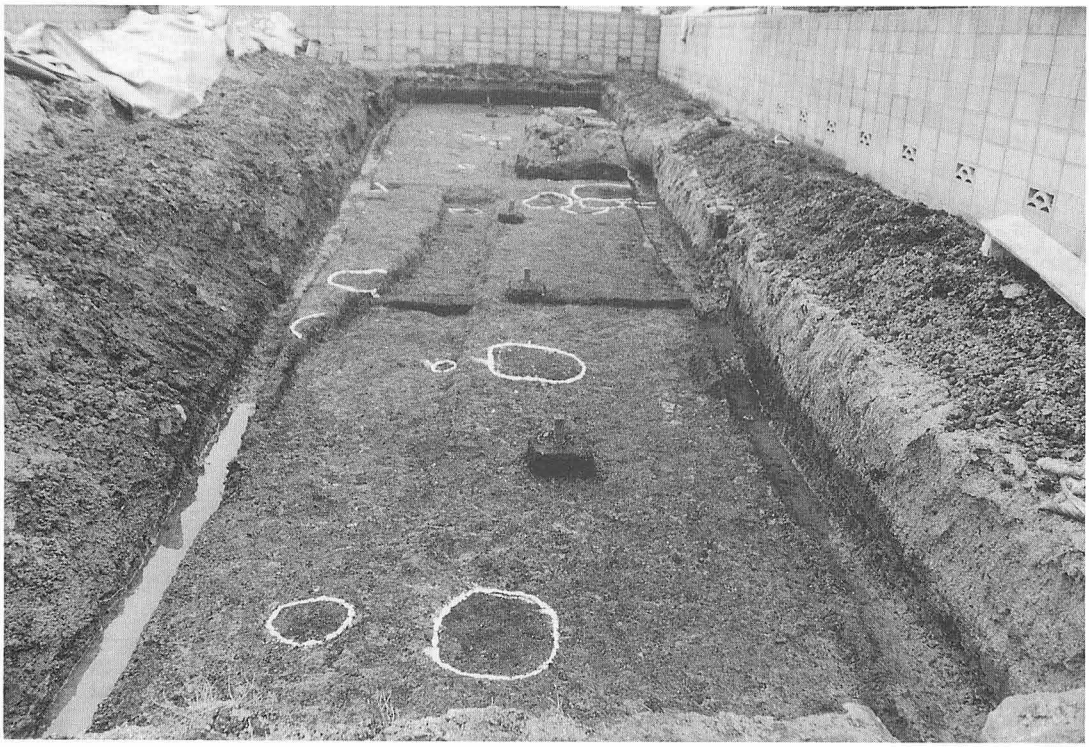
(4) 前掲注(3)

(5) 松原弘宣　1990「伊予国久米評の成立と回廊状遺構」『日本歴史』第504号

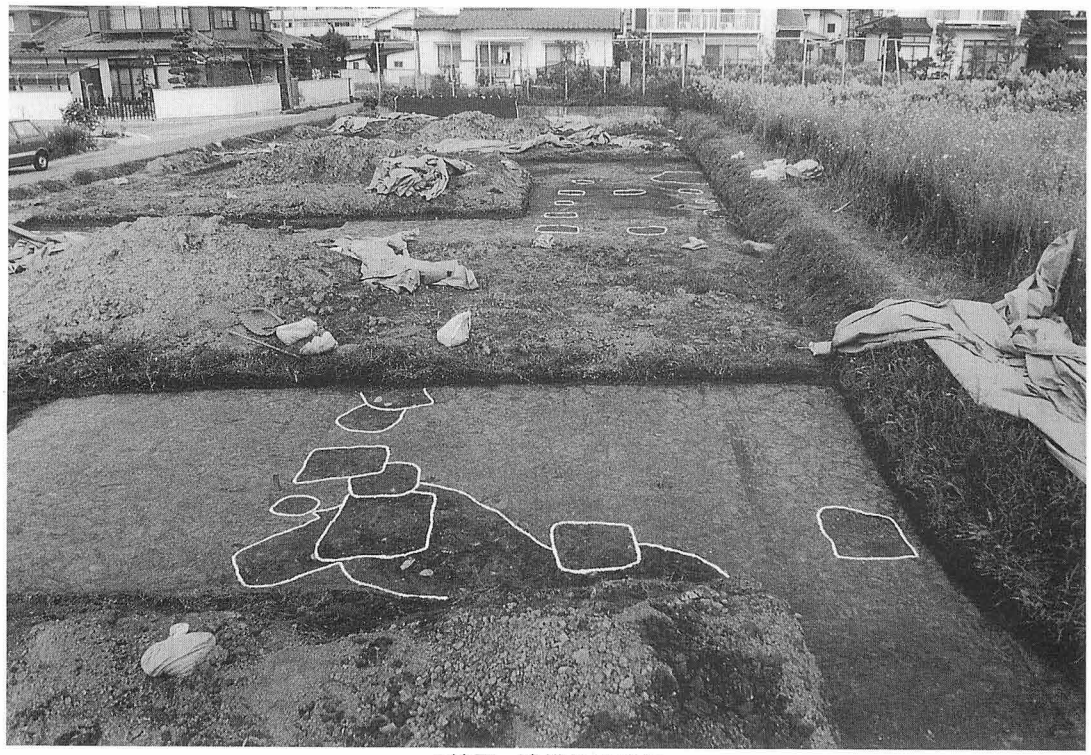
図　　版



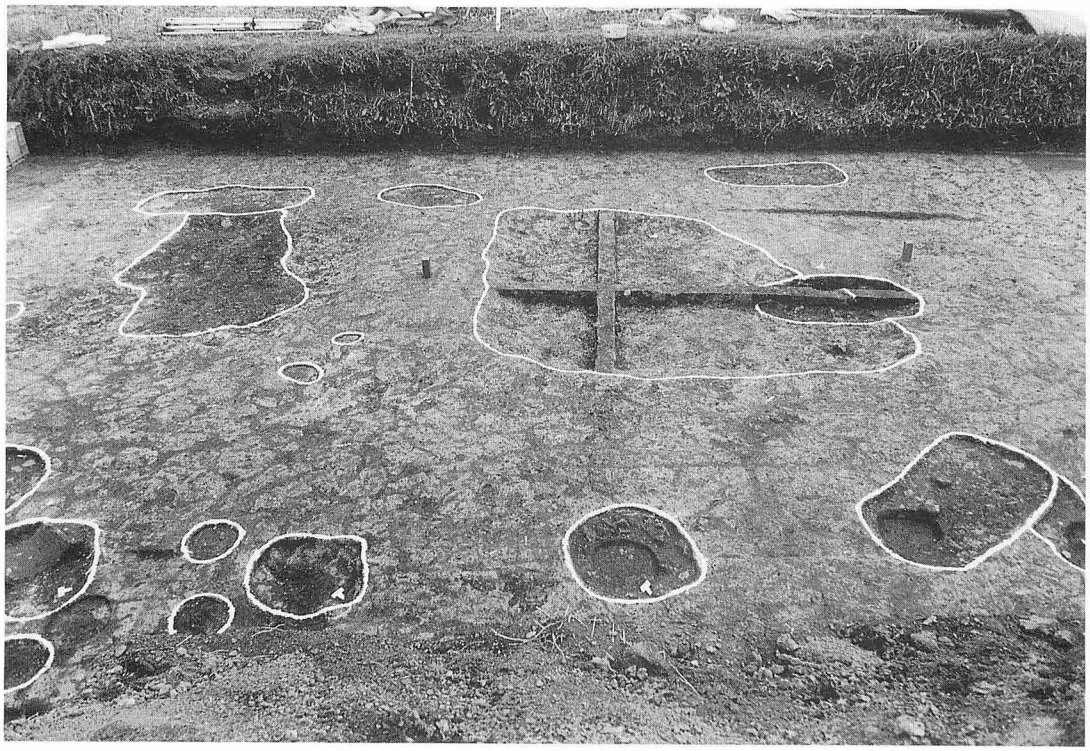
A地区　西半遺構検出状況



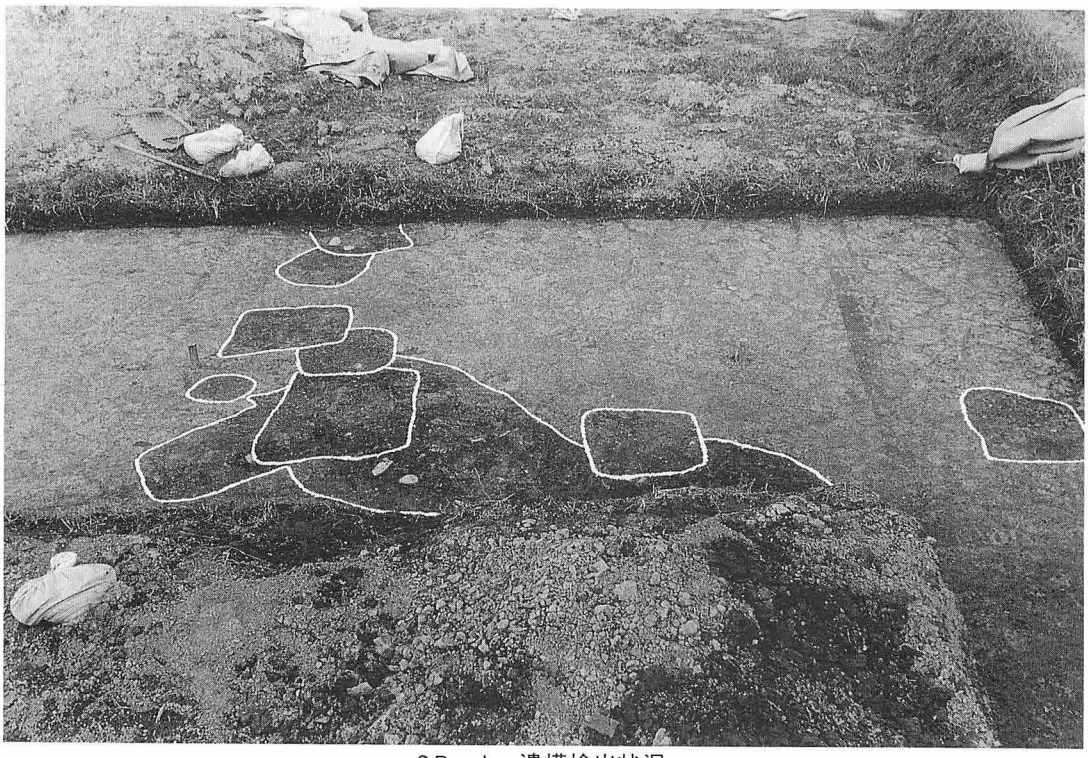
A地区　東半遺構検出状況



B地区　遺構検出状況

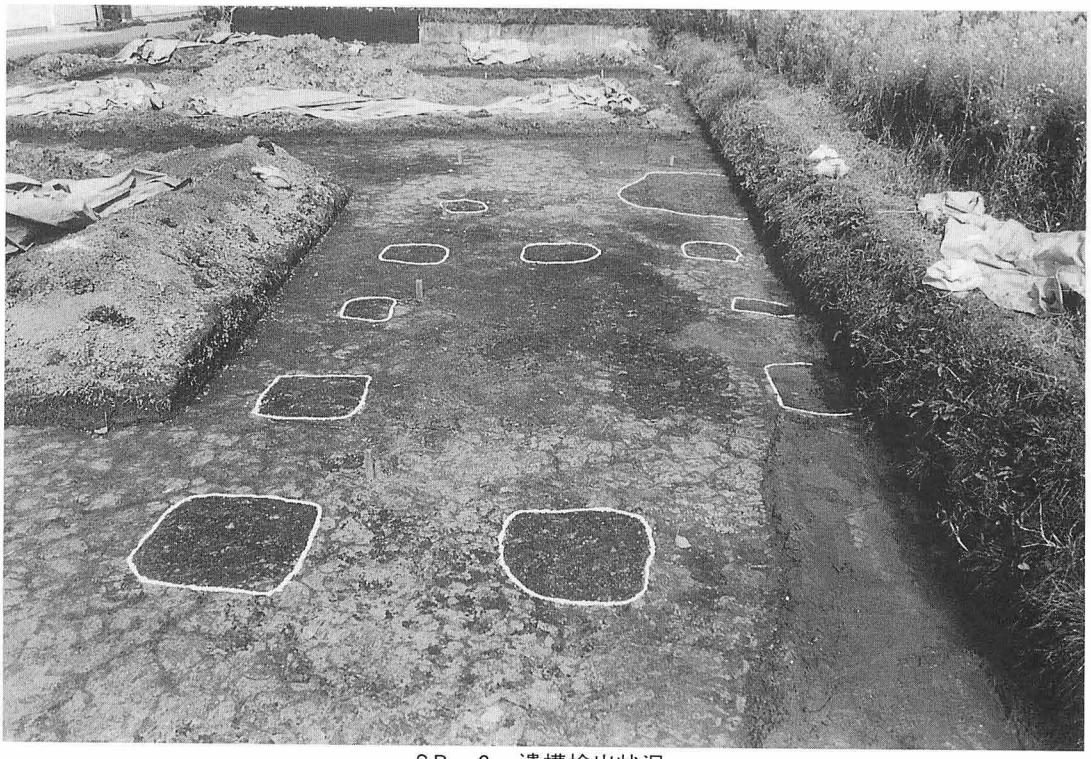


B地区　堀り上り

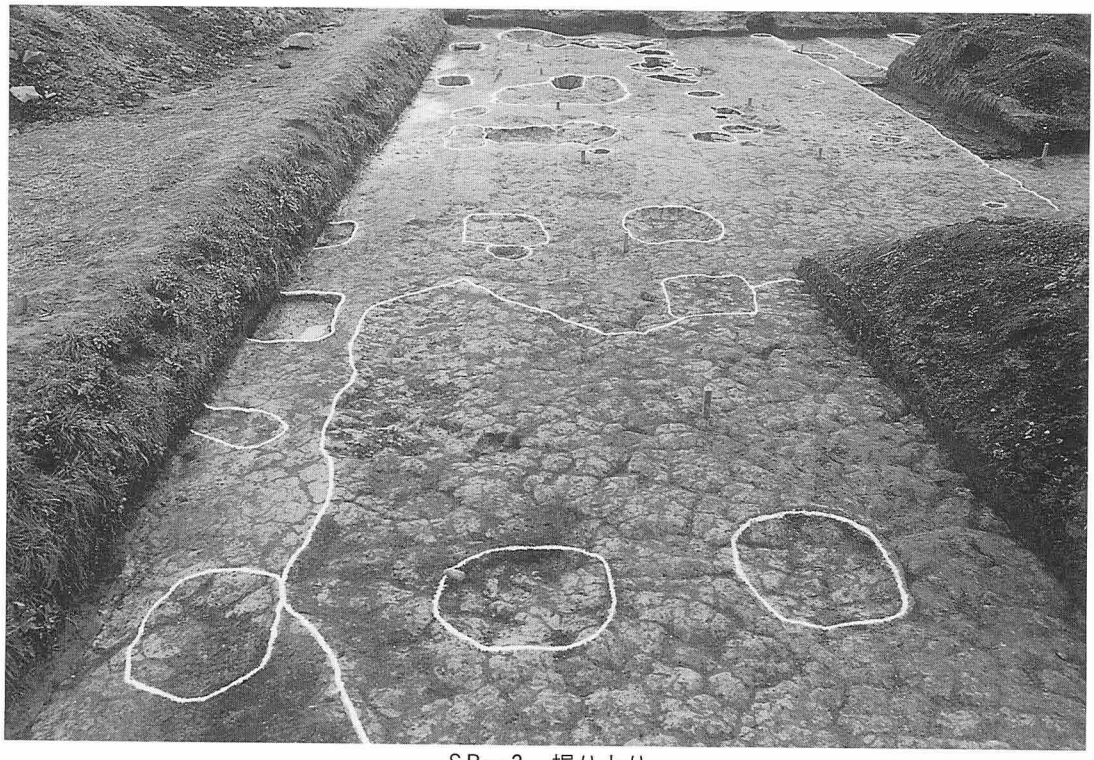


SB－1　遺構検出状況

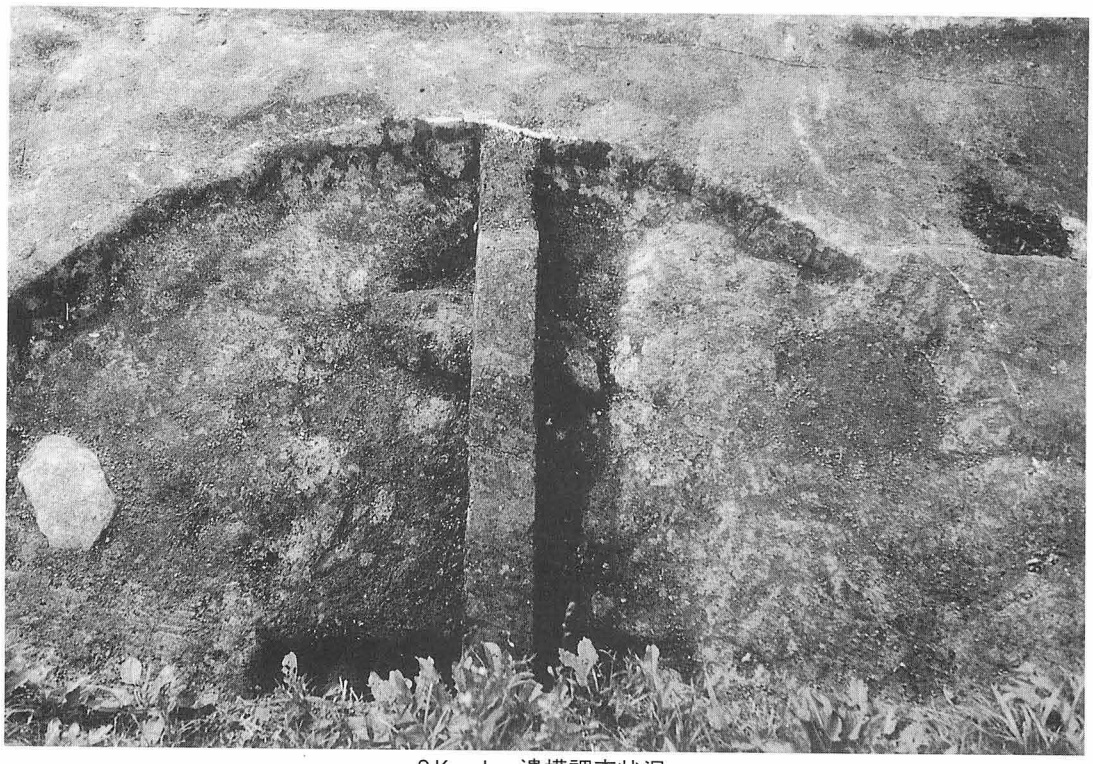
SB－1　掘り上り



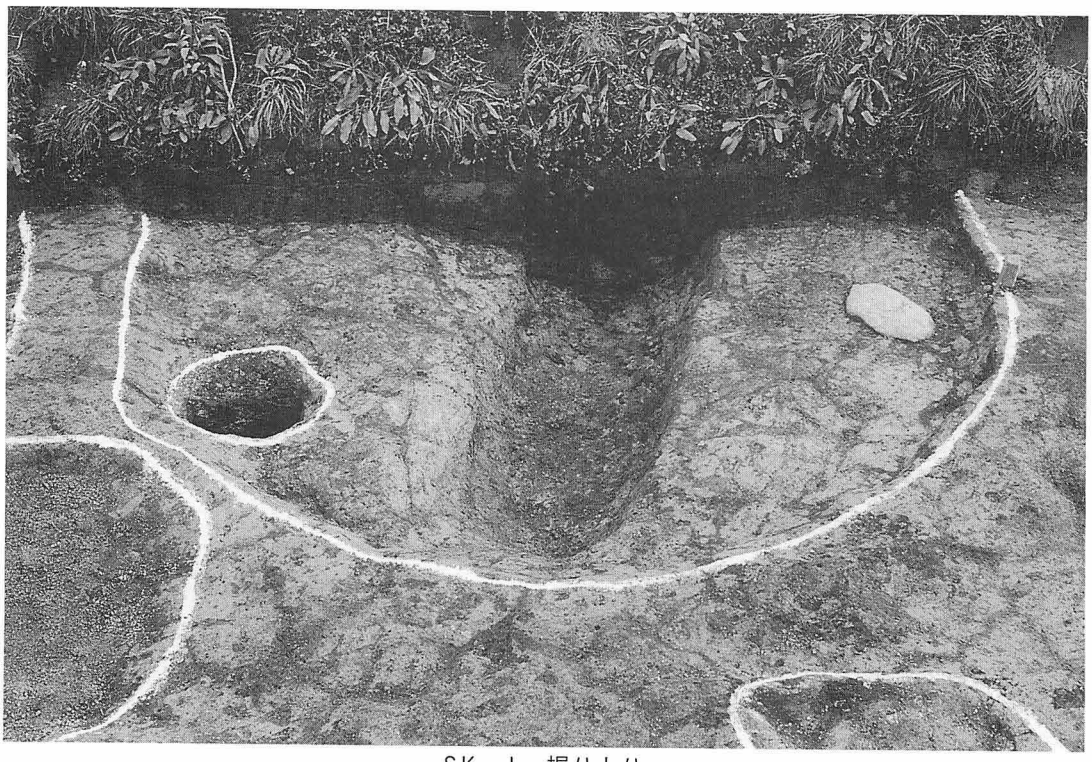
SB－2　遺構検出状況



SB－2　掘り上り

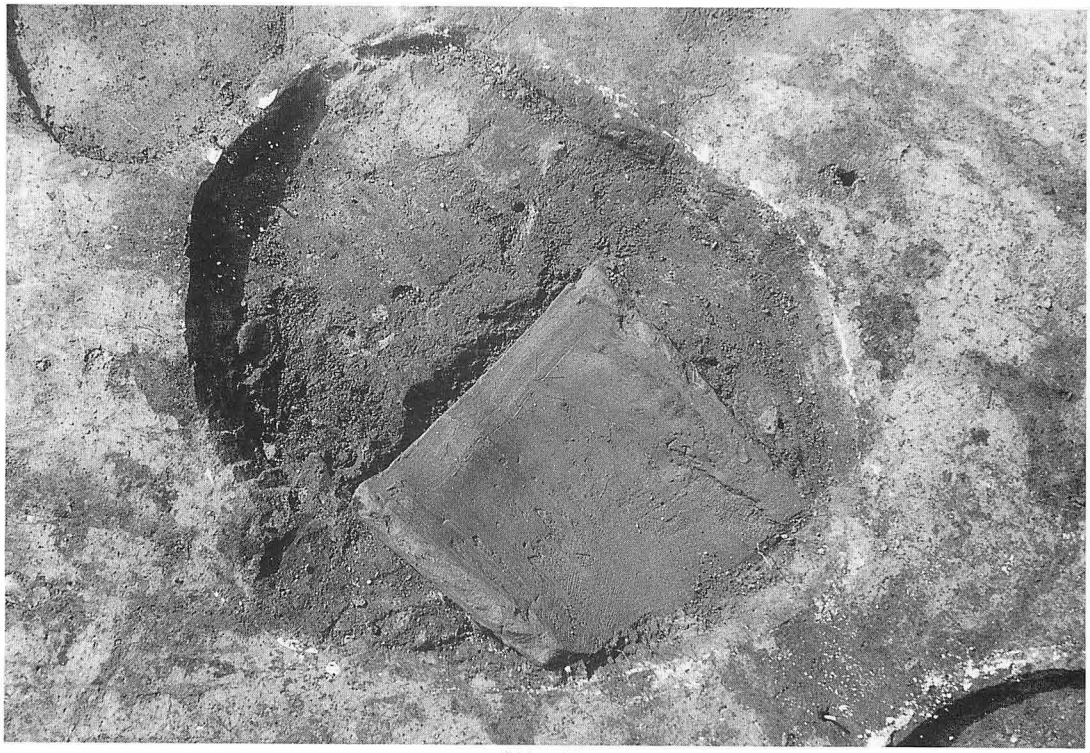


SK－1　遺構調査状況



SK－1　掘り上り

SP－31



SP－39

遺物包含層遺物出土状況(1)

遺物包含層遺物出土状況(2)

遺物包含層遺物出土状況(3)

遺物包含層遺物出土状況(4)

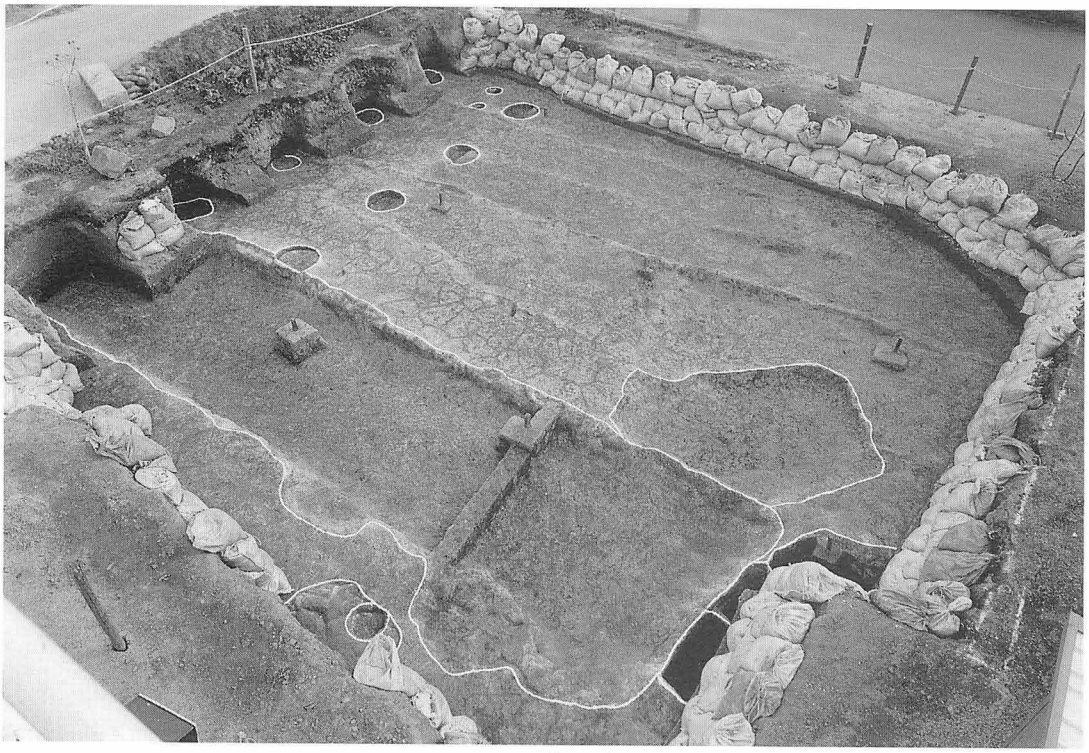
SK－3

SX－1

SD－4

SB－3

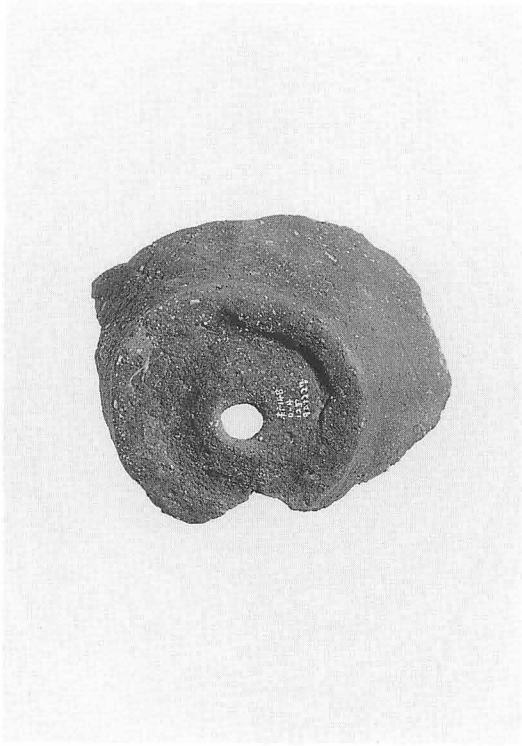
C地区 遺構検出状況



C地区　掘り上り

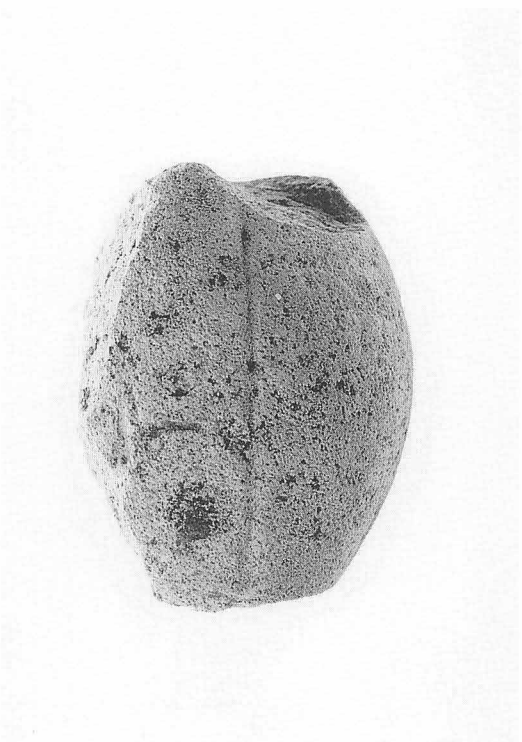
弥生土器

弥生土器

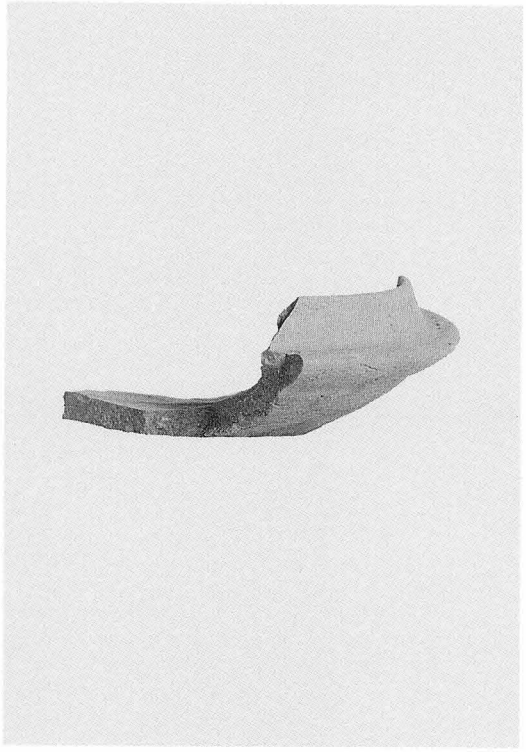


弥生土器

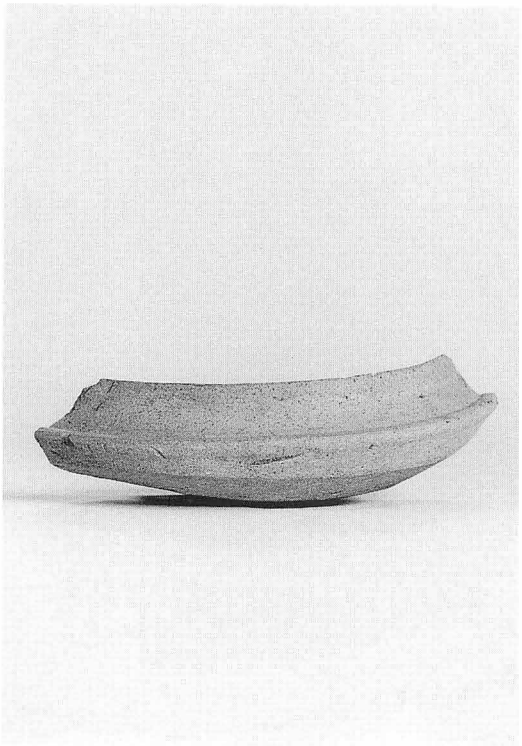
弥生土器

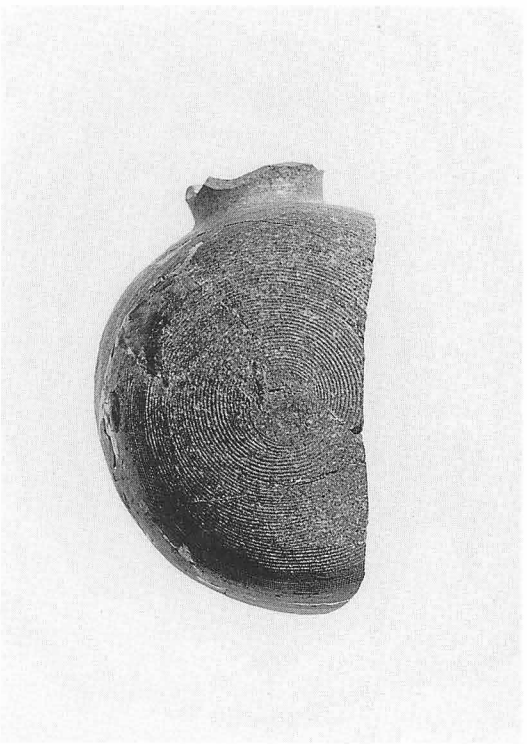


石　　錘



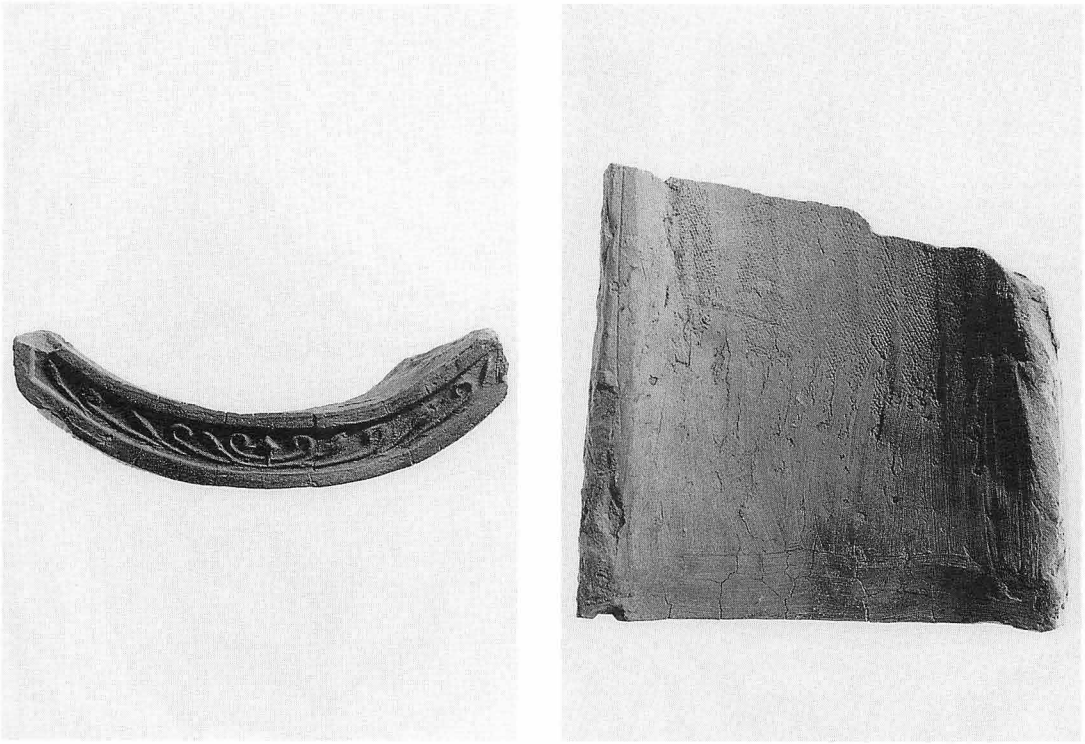
須恵器



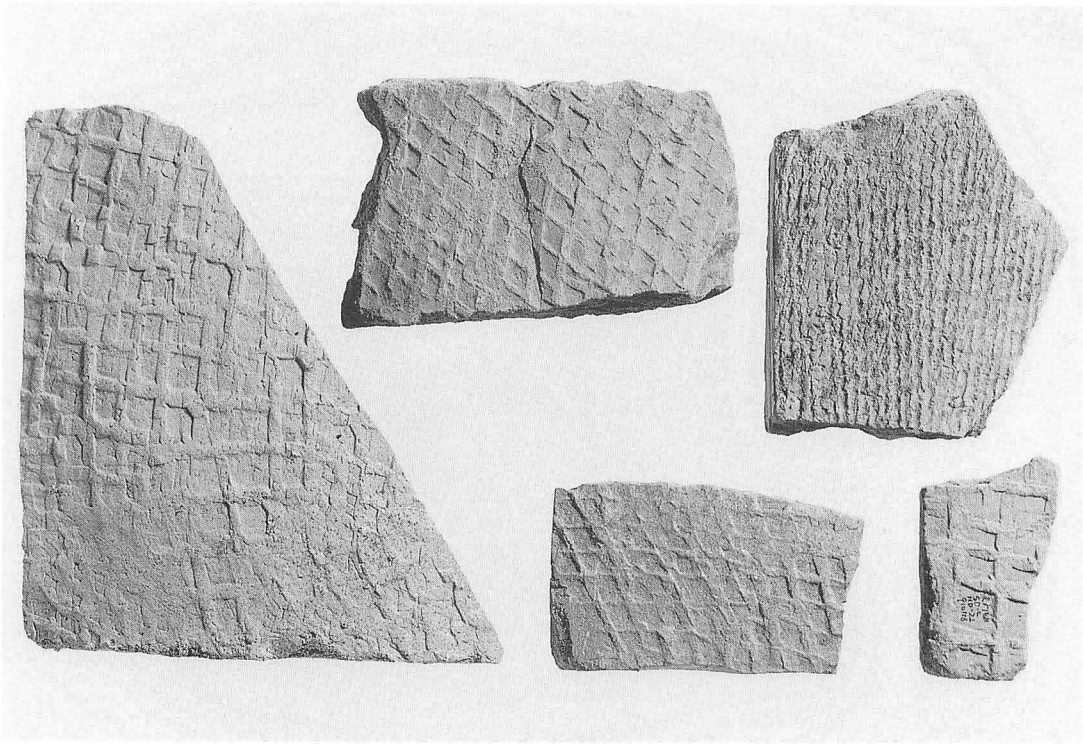


須恵器

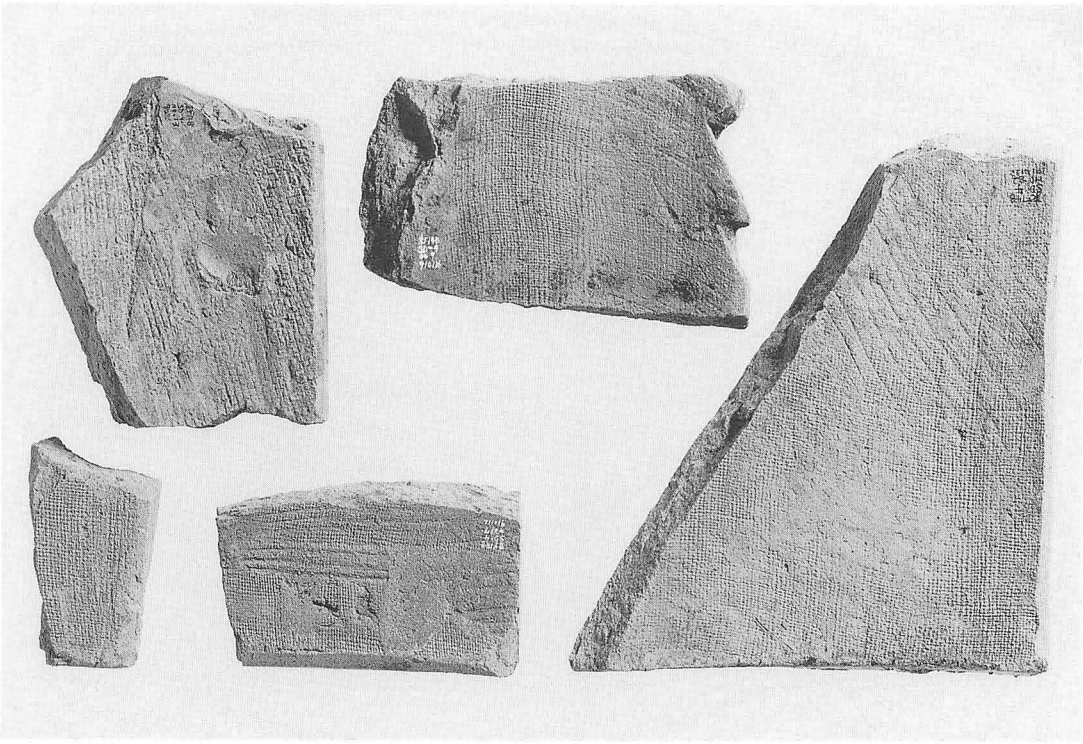
SP－31　出土軒丸瓦



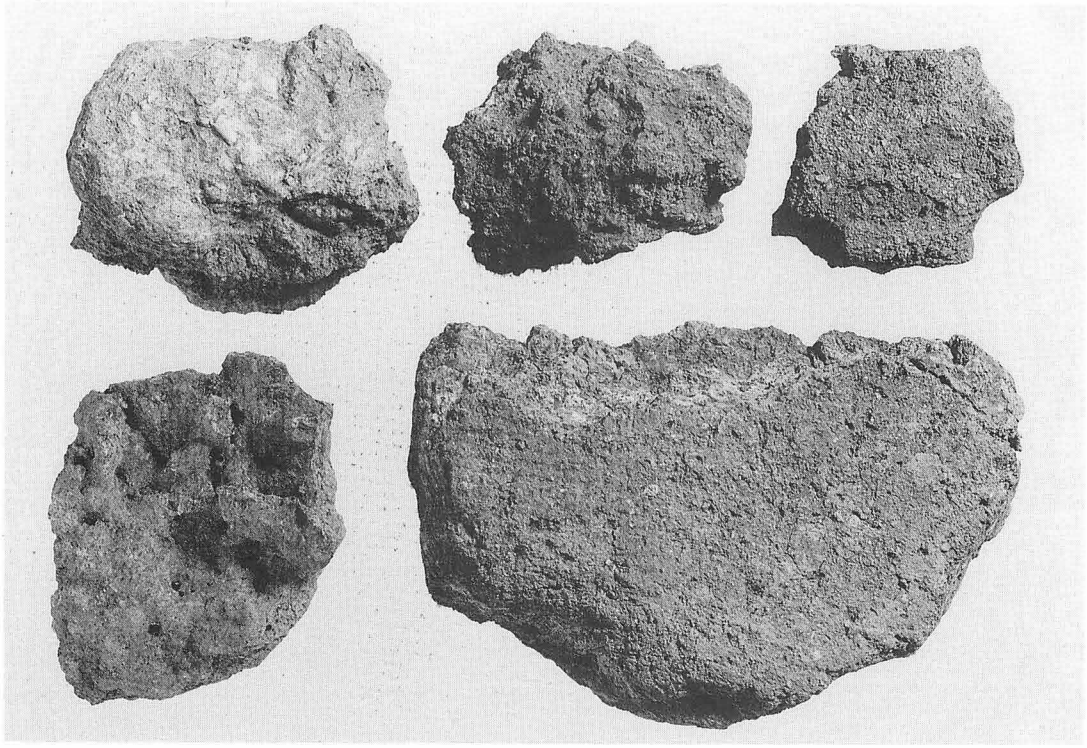
SP－39　出土軒平瓦



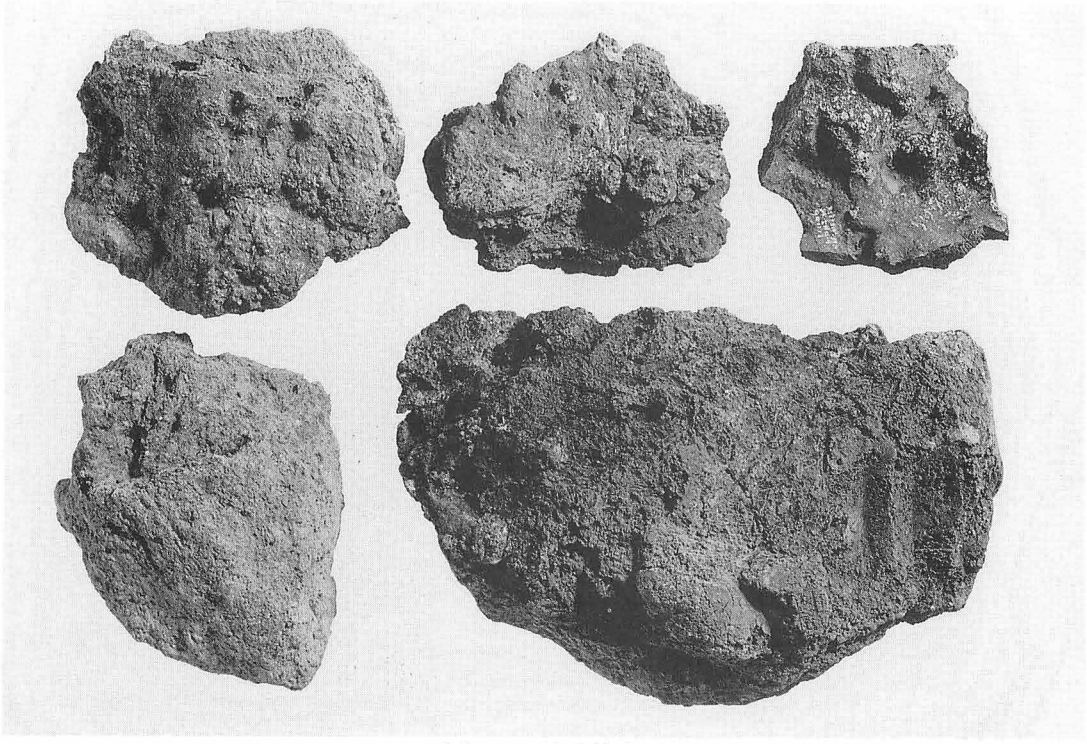
SD－4　出土瓦



SD－4　出土瓦



SK－5　出土焼土



SK－5　出土焼土

松山市文化財調査報告書　第23集

来住廃寺 －平成2年度調査概報－

平成3年3月31日　発行

編集・発行　松山市教育委員会　文化教育課
松山市立埋蔵文化財センター
〒791 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (0899) 23－6363

印　　刷　原印刷株式会社
〒791 松山市山越4丁目8－15
TEL (0899) 24－8823